



かみ い ざわ お せき

上居沢尾根遺跡

平成4年度県営圃場整備事業恩前
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1995.3

長野県原村教育委員会

かみ い ざわ お ね い せき
上 居 沢 尾 根 遺 跡

平成4年度県営圃場整備事業恩前
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1995.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が上厩沢尾根遺跡

序

八ヶ岳西麓に位置する原村では、農業の合理化と生産性向上を目的とした県営圃場整備事業が大規模に進められております。

一方、八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫として全国的に著名で古くから注目を集めてきました。

このたび報告書を刊行することになりました上居沢尾根遺跡は、古くから知られていた遺跡で、縄文時代の住居址の発見が伝えられています。たまたま平成4年度県営圃場整備事業恩前地区の予定地にかかり、諏訪地方事務所委託と国・県から補助金交付を受けた原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものであります。

発掘調査では、縄文時代中期の竪穴住居址8軒、竪穴1基、小竪穴53基、遺物集中箇所を検出し、それらに伴う数多い土器と石器が出土しております。

このような貴重な文化遺産を目のあたりにし、感動を覚えるとともに後世に伝えていく責任を強く感じるものであります。

このたびの発掘調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、柏木区および実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導をはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力で深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、炎天下でご苦勞された作業員の皆様により、失われていく貴重な文化財を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

- 1 本報告は「平成4年度県営園場整備事業恩前地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する上居沢尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付を受けた原村教育委員会が、平成4年6月25日から12月11日にかけて実施した。整理作業は、平成5年1月4日から7年3月20日まで行った。
- 3 調査における記録は平出一治・平林とし美、遺構の実測は平林、写真撮影は平出・平林が行い、遺構のトレースは原村教育委員会で行った。
- 4 土器の実測は中央航業株式会社に委託し、トレースは原村教育委員会で行い、石器の実測およびトレースは株式会社アルカに委託したが、一部のものは原村教育委員会で実測・トレースを行い、執筆は平出が行った。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、21の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査で、第10号竪穴住居址・土器集中箇処1と呼称して調査を進めた遺構については、整理作業で遺構の性格等を検討したなかで、第10号竪穴住居址を1号竪穴に、土器集中箇処1を遺物集中箇処1に変更したが、すでに遺物には「10号住」「土集1」と注記してある。

目 次

例 言

目 次

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	調査組織	3
3	発掘調査の経過	3
II	遺跡の位置と環境	8
1	遺跡の位置と自然環境	8
2	遺跡の歴史的環境	9
III	調査方法	10
1	調査区の設定と調査方法	10
2	土層	12
3	調査の概要	12
IV	遺構と遺物	17
1	縄文時代の遺構と遺物	17
(1)	竪穴住居址	17
(2)	竪穴	40
(3)	小竪穴	42
(4)	遺物集中箇所	67
(5)	遺構に伴わない遺物	77
2	近・現代の遺構と遺物	80
(1)	近世の墓塚	80
(2)	遺物	80
V	まとめ	80
	参考文献	81

図 版 目 次

第1図	原村城の地形断面模式図（宮川—上居沢尾根遺跡—赤岳ライン）	1
第2図	上居沢尾根遺跡の位置と付近の遺跡	6
第3図	発掘調査区域図・地形図	11
第4図	グリッド配置図	13
第5図	遺構配置図	15
第6図	第2・3・4号竪穴住居址・小竪穴44実測図	19
第7図	第5・6号竪穴住居址実測図	21
第8図	第2・3・5号竪穴住居址出土土器実測図・拓影	22
第9図	第5・6号竪穴住居址出土土器実測図・拓影	23
第10図	第6号竪穴住居址出土土器拓影、第5・6・9号竪穴住居址・1号竪穴出土石器実測図	24
第11図	第7号竪穴住居址・小竪穴44実測図	26
第12図	第7号竪穴住居址出土土器実測図その1	27
第13図	第7号竪穴住居址出土土器実測図その2	28
第14図	第7号竪穴住居址出土土器実測図その3	29
第15図	第7号竪穴住居址出土土器実測図・拓影その4	30
第16図	第7号竪穴住居址出土土器実測図その5	31
第17図	第7号竪穴住居址出土石器実測図その1	32
第18図	第7号竪穴住居址出土石器実測図その2	33
第19図	第8号竪穴住居址実測図	35
第20図	第8号竪穴住居址出土土器実測図	36
第21図	第8・9号竪穴住居址・1号竪穴出土土器実測図・拓影	37
第22図	第8号竪穴住居址出土石器実測図その1	38
第23図	第8号竪穴住居址出土石器実測図その2	39
第24図	第9号竪穴住居址・1号竪穴・小竪穴19・20・30実測図	41
第25図	小竪穴1・8実測図	43
第26図	小竪穴6・7実測図	44
第27図	小竪穴2・3・5・9～15実測図	47
第28図	小竪穴16・21～24・31～33・35・36実測図	48
第29図	小竪穴17・46～51実測図	51

第30図	小竪穴18・25～29・38～43実測図	56
第31図	小竪穴34・37・45・52・53実測図	59
第32図	小竪穴1・4・5・6出土土器拓影	60
第33図	小竪穴7・8・10・12・15・17・18・19・25・26出土土器拓影	61
第34図	小竪穴29・32・38・43・46出土土器拓影	62
第35図	小竪穴46～51出土土器拓影	63
第36図	小竪穴1・7・8・18・19・26・32・37・43・48出土土器実測図	64
第37図	遺物集中箇所1出土土器実測図その1	68
第38図	遺物集中箇所1出土土器実測図その2	69
第39図	遺物集中箇所1出土土器実測図その3	70
第40図	遺物集中箇所1出土土器実測図その4	71
第41図	遺物集中箇所1出土土器実測図その5	72
第42図	遺物集中箇所1出土土器実測図その6	73
第43図	遺物集中箇所1出土土器実測図その7	74
第44図	遺物集中箇所1出土土器実測図その1	75
第45図	遺物集中箇所1出土土器実測図その2	76
第46図	遺物集中箇所1出土土器実測図その3	77
第47図	第5・7号竪穴住居址、1号竪穴、遺物集中箇所1、遺構外出土土製品実測図	78
第48図	遺構外出土土器拓影	79

表 目 次

表1	上居沢尾根遺跡と付近の遺跡一覧	7
表2	遺構一覧表	82
	竪穴住居址	82
	竪穴	83
	小竪穴	83

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

農村地域はどこでも同じであろうが、後継者がいないことから高齢化は進むばかりである。だからと云って労力が少なくなることはなく、機械化を望む声は強くなるばかりである。その機械力を増すためには、農地や農道の整備が必要になる。それが原村における圃場整備事業であり、平成3年度に着工された「県営圃場整備事業恩前地区」内には、裏長峰遺跡（原村遺跡番号14）・程久保遺跡（原村遺跡番号15）・恩膳西遺跡（原村遺跡番号23）が所在していることから、その保護について平成2年8月8日に長野県教育委員会文化課、原村役場農林課、原村教育委員会の3者で協議を行った。

しかし、3遺跡ともその規模や性格などは不明瞭なものばかりであり、適切な結論を導き出すことができなかった。その後も諏訪地方事務所土地改良課・原村役場農林課・地元関係者と協議を重ねる中で、遺跡の範囲確認調査を行う話が浮上するが、県営圃場整備事業茅野市丸山地区に先立つ長峰遺跡（原村遺跡番号13）の緊急発掘調査を実施していたこともあり、調査体制を整えることはできなかった。また、時間的にも余裕はなく、表面採集という限られた調査を試みることにした。

村教育委員会は、平成3年11月7・8・19日に県営圃場整備事業予定地内の踏査を実施したが、やはり満足のいく結果を得ることができないまま、その資料を基にして、平成3年12月16日に原村役場および現地で行なわれた長野県教育委員会の「平成4年度農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者であった。

協議では、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいが、前記したように農業者の強い要望があり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き。発掘調査の時期については



第1図 原村城の地形断面模式図（宮川—上居沢尾根遺跡—赤岳ライン）

一日も早い機械化を望む声は強く、平成4年度の調査を要望されたが、調査員および作業員が少ないなど調査体制が整わないことから、平成4・5年度の2年間にわたり緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

前おきが長くなってしまったが、保護協議の結果、平成4年度は極めてきつい日程の中で発掘調査を進めることになり、はじめに裏長峰遺跡の発掘調査に着手した。そんな折り、上居沢尾根遺跡内で伐採作業が行われていることに気づき、作業者に開発の旨を問いあわせると、県営圃場整備事業恩前地区内であることが判明した。予定地域の地図を確認するが予定地外であり、原村役場農林課に確認を行う。

その結果、上居沢尾根遺跡は予定地の変更に伴って繰り入れられた地域であることがわかった。しかし、平成2年度ならびに同3年度に行った保護協議では、議題に上がらなかった遺跡であるため、県教育委員会文化課の指導をいただく中で、諏訪地方事務所土地改良課および原村役場農林課と協議を行う。

当地方の圃場整備は尾根を削り沢を埋めることになるが、上居沢尾根遺跡は、その尾根上に立地しているため、工事の工程から計画を変更することができない状況であり、1日も早い発掘調査を実施し記録保存をはかることで同意をみる。しかし、平成4年度に計画した調査面積は極めて膨大であり、その当初計画した発掘調査の終了も危ぶまれるなかで、新たに上居沢尾根遺跡の調査を実施することになる。しかし、その調査面積を終了することは物理的に無理なことであり、最大努力を行うなかで最終的には、工事変更が可能な予定地区内では東端に位置する程久保遺跡で調整することにする。

悪い時は悪いもので、グリッド発掘をはじめると予定地に隣接する桑畑では重機による抜根作業が行われた。その作業に立ち会った結果、桑の木が大きかったこともあり、作業による掘り込みは深くローム層に達する箇所があり、それらの観察ではローム層までの深さは違い深い箇所がみられた。また、土器と石器の出土は多く、その違いは自然地形によるものではなく、住居址ないしは小竪穴の埋没が容易に想定できる状態であり、従来考えていた上居沢尾根遺跡の範囲よりも東に大きく広がっていることが判明した。そんなことから再び、諏訪地方事務所土地改良課および原村役場農林課と協議を行い、やはり遺跡の広がり判明した範囲についても発掘調査を実施することにした。

原村教育委員会は、国庫及び県費から発掘調査補助金交付をうけ、また、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託をうけ、平成4年6月25日から12月11日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2 調査組織

上居沢尾根遺跡発掘調査団名簿

団 長 平林太尾（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出一治

調 査 員 伊藤 証 平林とし美

調査参加者 発掘作業（平成4年度） 平林 途雄 清水 豊一
清水 太助 松沢喜代次 菊池 利光 菊池 行雄
徳谷 眞樹 守屋喜利治 守屋 菊一 小林 主税
篠原 文子 小林 ミサ 清水としみ 中村きみあ
宮坂とし子 藤原智恵子 五味富貴枝 小平 章子
清水 米美 清水つるゑ 菊池かずみ 藤森 米子
守屋 好 白鳥すみあ

原小学校5年1組

整理作業（平成6年度） 津金喜美子 鎌倉あき子 坂本ちづる

（順不同）

事 務 局 原村教育委員会事務局

（平成4年度） 小池平八郎（教育次長 ～平成5年1月）

大口美代子（庶務係長） 宮坂 道彦 伊藤 佳江

伊藤 証 平出 一治

（平成5年度） 平林今朝二（教育次長） 大口美代子（庶務係長）

宮坂 道彦 伊藤 佳江 五味 一郎（主任）

平出 一治 平林とし美

（平成6年度） 平林今朝二（教育次長） 大口美代子（庶務係長）

宮坂 道彦（主任） 伊藤 佳江

五味 一郎（文化財係長） 平出 一治 平林とし美

3 発掘調査の経過

平成4年6月25日 グリッド設定を行い、遺物の包含状況の把握と、遺構の埋没状況を確認することを目的にグリッド発掘をはじめ。

26日 引き続きグリッド設定と発掘を行う。

- 27日 引き続きグリッド設定と発掘を行う。
- 7月1日 重機による表土剥ぎをはじめが、木の根が多く思うように進まない。
- 3日 上居沢尾根遺跡内の石造文化財の調査を行う。
- 4日 縄文時代の住居址を検出する。「遺跡の歴史的環境」で述べるが「柏木明神1号炉西」と注記された土器が、村教育委員会に保管されていることから本址を便宜上第2号住居址。また、人骨の遺存した近世の墓塚を検出した。やはり便宜上墓塚1と呼ぶことにする。
- 9日 石造文化財の移転作業が行われる。
- 27日 原小学校5年生の体験発掘を行う。
- 9月7日 小堅穴1・2の検出写真の撮影を行い、精査をはじめ。
- 9日 4号住居址の検出写真撮影、小堅穴2の完掘写真の撮影、小堅穴1の埋土の観察を行う。
- 12日 小堅穴4の検出写真の撮影を行う。
- 16日 2・3・4号住居址の完掘写真の撮影、小堅穴4の埋土の観察を行う。
- 17日 小堅穴5・6・7の検出写真の撮影、小堅穴1・3・4の完掘写真の撮影、小堅穴3・5の埋土の観察を行う。
- 18日 2号住居址埋燵炉の埋設状態の観察を行う。
- 21日 近世の墓塚人骨の取り上げを行う。
- 28日 小堅穴5の完掘写真の撮影、小堅穴6の埋土の観察を行う。
- 10月1日 小堅穴8の検出写真の撮影を行う。近世の墓塚2基を検出する。
- 2日 小堅穴9の検出写真の撮影、小堅穴6の完掘写真の撮影、小堅穴5・7の埋土の観察を行う。精査を進めていた墓塚2・3に人骨が遺存、新たに墓塚4を検出する。
- 3日 小堅穴10・11・12・14の検出写真の撮影、小堅穴7の完掘写真の撮影、小堅穴8の埋土の観察を行う。
- 6日 小堅穴14の完掘写真の撮影、小堅穴11の埋土の観察を行う。
- 7日 小堅穴8・11・13の完掘写真の撮影、小堅穴10・12の埋土の観察を行う。
- 8日 小堅穴10・12の完掘写真の撮影を行う。
- 9日 小堅穴15の完掘写真の撮影、小堅穴15の埋土の観察を行う。
- 12日 今日から御射山遺跡の発掘調査のため作業を一時中断する。
- 16日 作物の取り入れの終わった畑地の表度剥ぎを重機ではじめる。
- 23日 御射山遺跡の調査が終了したため遺構の検出作業を再会する。

- 26日 重複する5号と6号住居址、7号・8号住居址、小竪穴17の検出写真の撮影を行い、精査をはじめ。
- 27日 10号住居址（整理作業で竪穴1に改める。）、小竪穴18～24の検出写真の撮影を行う。
- 28日 9号住居址、小竪穴25～32の検出写真の撮影、10号住居址（竪穴1）の埋土の観察を行う。
- 30日 小竪穴33～35の検出写真の撮影、小竪穴23の完掘写真の撮影、重複する5・6号住居址、小竪穴18・21・23・24・31の埋土の観察を行う。
- 31日 小竪穴45の検出写真の撮影、小竪穴21・24・31の完掘写真の撮影、小竪穴32～34の埋土の観察を行う。
- 11月2日 小竪穴46の検出写真の撮影、小竪穴22の完掘写真の撮影、小竪穴25・27～29・35～37・39～41・45・46の埋土の観察を行う。
- 4日 小竪穴32～37の完掘写真の撮影、小竪穴26・44の埋土の観察を行う。
- 5日 小竪穴27～29・38の完掘写真の撮影、8号住居址、小竪穴17・20・26・44・46の埋土の観察を行う。
- 6日 小竪穴17・18・25・26・38～41・44・46の完掘写真の撮影を行う。
- 7日 小竪穴7（集石）の精査と礫の取上げ、小竪穴20の完掘写真の撮影を行う。
- 10日 小竪穴32の完掘写真の撮影を行う。
- 11日 5・6号住居址の遺物出土状況の写真撮影を行う。
- 12日 9号住居址の検出、7号・8号住居址の遺物出土状況、10号住居址（竪穴1）の完掘写真の撮影を行う。
- 14日 小竪穴17・25～29・46の完掘写真の撮影を行う。
- 19日 9号住居址の完掘写真の撮影を行う。
- 25日 小竪穴47～49の検出写真の撮影、小竪穴43の埋土の観察を行う。
- 26日 小竪穴43の完掘写真の撮影を行う。
- 28日 8号住居址の完掘写真の撮影、6・7号住居址の埋燵炉のカッティング調査、小竪穴46の埋土の観察を行う。
- 30日 小竪穴52の検出写真、5・6・7号住居址の完掘写真の撮影を行う。
- 12月1日 小竪穴50・51の検出写真、小竪穴19・47～49の完掘写真の撮影、7号住居址の炉石取上げを行う。
- 2日 小竪穴50・51の埋土の観察、小竪穴51・52の完掘写真の撮影を行う。
- 3日 小竪穴50の完掘写真、遺構の全景写真の撮影を行う。



第2図 上居沢尾根遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

表1 上居沢尾根遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
1	家 裏	○				○	○				○		昭和59年度発掘調査	
2	大久保前										○		昭和54年消滅	
3	向 尾 根	○	○										昭和54年度発掘調査 消滅	
4	横 道 下					○					○		昭和54年度発掘調査 消滅	
9	比 丘 尾					○								
11	阿 前		○			○					○		昭和50～54・平成5年度発掘調査	
12	前 沢					○					○		昭和55・61年度発掘調査	
13	長 峰					○		○				○	平成3年度発掘調査 消滅	
14	裏 長 峰	○				○					○		平成4年度発掘調査 消滅	
15	裏 程 久 保					○						○	平成4・5年度発掘調査 消滅	
17	白ヶ原					○					○		昭和53年度発掘調査	
18	前尾根西													
19	南 平													
20	前 尾 根					○							昭和44・52～54・59年度発掘調査	
21	上居沢尾根					○					○	○	平成4年度発掘調査	
22	清 水					○								
23	恩 勝 西	○		○		○					○		昭和62・平成5・6年度発掘調査	
24	恩 勝 根			○		○					○		昭和62年度詳細分布調査	
25	裏 尾 根					○								
26	家 裏 下										○		昭和59年度発掘調査	
27	關 道 沢												昭和62年度発掘調査	
28	宮 前										○			
29	向 尾 根					○					○		昭和50・54年度発掘調査	
30	南 尾 根													
42	上居沢尾根					○					○		昭和50～53・56・平成6年度発掘調査	
43	中 阿 久												昭和51年度発掘調査	
44	原 山													
45	広 原 日 向	○											昭和58年度発掘調査	
46	宿 シ 尻	○				○					○		平成5・6年度発掘調査 消滅	
47	ツ シ キ					○							昭和51年度発掘調査	
48	輪 の 木					○								
49	大 石	○				○						○	昭和50・平成4・5年度発掘調査	
50	山 の 神					○							昭和54年度発掘調査	
51	尾 ヶ 原					○							昭和63・平成元年度発掘調査	
52	滝 水 掛													
53	雁 頭 沢											○	昭和54・57・63・平成4・5年度発掘調査	
54	宮 ノ 下					○					○		昭和57・58年度発掘調査	
55	中 尾 根													
56	家 前 尾 根													
57	久保地尾根												平成6年度発掘調査	
61	番 銅 場												昭和50年消滅	
87	下 原 山 北					○							昭和63・平成元年度発掘調査	
88	下 原 山 南												昭和63・平成元年度発掘調査	
93	大 石 西					○							平成3年度発掘調査	
95	土 井 平					○							平成4年度発掘調査 消滅	

- 4日 炉址焼土のカッティング調査を行う。
10日 片付けをはじめめる。
11日 機材の撤収を行い調査は終了する。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と自然環境

上居沢尾根遺跡（原村遺跡番号21）は、柏木区の東方、長野県諏訪郡原村7616番地4ほかに位置する。

遺跡は、八ヶ岳から流下する小早川と裏沢川という2本の小河川によって、南と北を浸蝕された東西に細長い尾根上に立地する。標高は955m前後を測り、尾根幅は60m程で縄文時代中期の遺跡としては広くない。調査地区の地目は山林・原野・普通畑で地味は良い。しかし、本調査の対象地から外れる遺跡の多くは共同墓地であり、すでにその多くは破壊されていることが考えられる。南の小早川側の斜面は、県道と水田造成により地形は変わっているが、比較的なだらかな傾斜をもっているのに対し、北の裏沢川側は急な斜面となっている。

これより西は、約2000m先でフォッサマグナの西縁である糸魚川―静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

このあたりは八ヶ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられ、旧石器時代・縄文時代および平安時代の遺跡が数多く埋蔵されている。なお、原村における遺跡の高度限界は1200m前後のラインである。

この上居沢尾根遺跡の周辺には、第2図と表1に示したように大小様々な遺跡が分布しており、その密度が極めて高い地域である。ここでは、発掘調査が行われた遺跡の中から、本遺跡に関係が深い縄文時代の遺跡に目を向けてみると、小早川の対岸は原村屈指の大遺跡の一つである前尾根遺跡（原村遺跡番号20）がある。その西方には国史跡である阿久遺跡（同11）、柏木南遺跡（同10）、居沢尾根遺跡（同42）が、北方にはやはり原村屈指の大遺跡である恩勝遺跡（同24）、家裏遺跡（同1）、やはり県営圃場整備事業丸山地区や恩前地区に先立って発掘調査を実施した長峰遺跡（同13）、程久保遺跡（同15）、恩勝西遺跡（同23）などがある。まだ発掘調査が実施されなかった遺跡や、実施されたが対象範囲が狭いことなどから、性格などが不明瞭な遺跡も多くあるが、いずれにしろ縄文時代中期の一大遺跡群が形成されている地域であることは確かなようである。

2 遺跡の歴史的環境

本遺跡の遺跡名は、昭和29年作成の長野県埋蔵文化財調査カードに「上井平遺跡（柏木明神）」との記載がみえ、『信濃史料 第1巻』に「柏木 上井平」、長野県教育委員会が昭和46年度に実施した「農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」に「柏木明神遺跡」と記載されたことにより、同一遺跡を別々の遺跡名で呼称することになってしまった。すくなくならず混乱していたこともあり、昭和54年度に長野県教育委員会が実施した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」の折り整理し「上居沢尾根遺跡」と改め今日に至っている。

上居沢尾根遺跡については、『原村誌 上巻』で次のように述べている。

上居沢尾根遺跡（柏木）

柏木区の東端に隣接する遺跡である。『信濃史料一』では上井平遺跡と呼称し、縄文時代中期の阿玉台式・勝坂式・加曾利E式土器と、打製石斧・磨製石斧・凹石の発見を伝えているのが本遺跡である。その基礎資料と考えられる「長野県埋蔵文化財埋蔵地調査カード」に遺跡名は「上井平遺跡（柏木明神）」と記録されている。昭和46年に県教育委員会が実施した農業振興地域等開発地域文化財緊急分布調査の報告書では、中期の勝坂式、加曾利E式土器の破片と、石器では打製石斧・磨製石斧・凹石の発見を伝え、住居址の存在を推測している。

村教育委員会に保管されている中期の新道式土器の一見顔面を思わせる把手を持つ大破片に「柏木明神 1号炉西」と注記がみられる。教育委員会に発掘（発見）記録が残されていないため、発見者および発見年月日など不詳な資料ではあるが新道式期の住居址が見出されたことを物語っている。また、完形の小形有孔鍔付土器も発見されているが、やはり発見者および発見年月日は不明である。

昭和48～50年にわたって諏訪清陵高等学校地歴部考古班の手で実施された分布調査では、九兵衛尾根式・絡沢式・新道式・藤内I式の土器破片と打製石斧が採集されている。

さらに道路改良工事の際に数多い土器の発見を伝え聞くが、詳細については不明である。原村において比較的少ない縄文時代中期前半を中心とする遺跡で、表面採集とは思えないような良好な資料を採集している上に、不明確な点が多いとはいうものの住居址の発見もあり、今後より注意しなくてはならない遺跡である。

本遺跡出土の小形有孔鍔付土器について若干の説明を加えてみることにしよう。胎土に

は長石粒・石英粒および角閃石を混入し、有孔罽付土器としてはあまり良質でない。成形は多少のゆがみ以外は普通で、焼成はあまり良くない。罽より下に縄文が施され、小孔は罽の上方基部から内面に九個穿たれているが、小孔の間隔は不規則である。外壁罽付近には赤彩の施された痕跡が認められる。大きさは高いところで9.6cm、低いところで8.8cmを計り0.8cmの傾きをもつ樽形の完形品である。(後略)

遺跡についての記述を再録したが、遺跡が周知されたのが古いこともあり、発見されている遺物は多いようである。その中で「柏木明神 1号炉西」と注記された土器について述べている。

土器が発見された動機等について多くの人たちから聞き取りを行ったが、当時の記憶はすでに霧散し詳しいことを知る人はいなかった。話をまとめると、本調査で検出した2・3・4号住居址の南側は区有地であり、以前は住宅の壁土(赤土)を採っていたところである。土採りの折りに土器や石器が発見される機会は多かったようで、宮坂英弉氏が調査を行い数多い遺物が出土したことを聞くことができた。その調査で発見された土器が教育委員会に残されているようである。しかし、その地点は土採りによってすでになくなっている。

また、本調査地点に隣接する桑畑では重機による抜根作業が行われた。作業に立ち会ったところ、根を抜く作業であるため掘り込みは深くなり、数多い土器や石器の発見に接し、また、ローム層までの深さに違いがみられた。その違いは、自然地形によるものとは考えられない状態で、住居址ないしは小竪穴が埋没しているものと思われた。それは従来考えられていた上居沢尾根遺跡の範囲より東に広がることが判明した。

Ⅲ 調査方法

1 調査区の設定と調査方法

発掘に先立ち、東西南北(磁北)に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区・C区・D区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに2×2mの小地区(グリッド)に分割し、東西方向は西からA~Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた(第4図)。

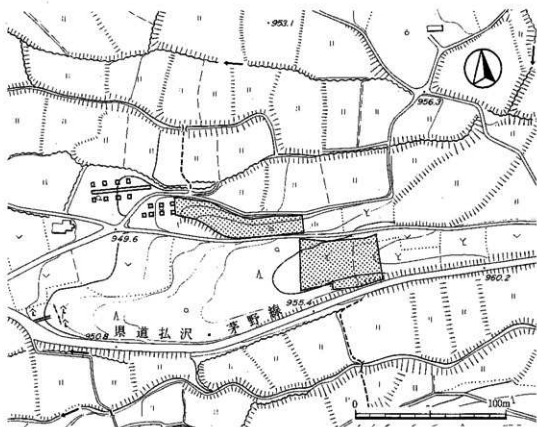
個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図左上の2×2mの発掘グリッドでみると、大地区はA区であり、小地区の東西方向はDラインにあたり、南北方向は70ラインで、それは「D-70」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「AD-70」となる。

発掘調査の対象は、平成4年度県営圃場整備事業恩前地区にかかる遺跡の全域におよぶ(第3図)。

グリッド発掘を行い表土の厚さの確認を行い、遺跡の性格が確認できた時点からは重機による表土剥ぎを行い。その後遺構の検出に努めた。

発掘調査は原則としてローム層の上面まで層別に行った。遺物は、基本的にグリッド別・層別にとり上げ、遺構に伴うものは遺構別に取り上げた。

測量は、予め設定した2m四方のグリッドを基準とするやり方方式による。



第3図 発掘調査区域図・地形図 (1:2,500)

2 土層

本遺跡における層序は、尾根上と北斜面とは違いがみられた。

尾根上は住居址が発見された地区で、地山のローム層までは、40cm前後を計る深い所もみられはしたが、浅い箇所が多く、中にはロームを耕作土としている所もみられ、最悪の状態であった。基本的には上層から黒褐色土（表土）・黒色土・褐色土・ソフトロームである。

表土である耕作土の直下がローム層となってしまう箇所は広範囲におよび、表土の直下がローム層となることは、土の堆積事態が薄かったことも充分考えられることであるし、調査地区が遺跡の東端にあたり、この辺りの尾根幅は馬の背状に狭くなってきており、土の流出も多かったことが考えられよう。

おおまかな観察結果を記しておきたい。

第Ⅰ層 黒褐色土層 表土層・畑の耕作土で15～25cmの厚さである。

第Ⅱ層 黒色土層 第Ⅰ層よりしまっている。5～15cmを計り、ローム層までが深い箇所はこの層が厚く堆積していた。

第Ⅲ層 黒褐色土層 しまり堅さは第Ⅱ層と同じである。この層が認められない箇所が多い。

第Ⅳ層 ソフトローム層

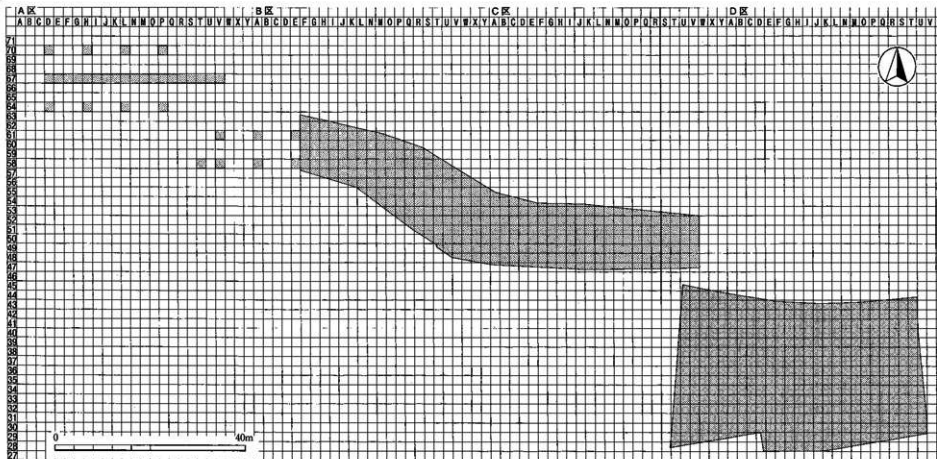
3 調査の概要

上居沢尾根遺跡の発掘調査は、平成4年度県営圃場整備事業恩前地区に先立つもので、平成4年6月25日から12月11日にわり、第4図のグリッド配置図に示したように825グリッド2,903㎡の平面発掘を実施した。

調査の結果、当地方の遺跡としては比較的尾根幅が狭い尾根上の平坦部から緩やかな北斜面で、縄文時代中期の竪穴住居址8軒、竪穴1基、小竪穴53基、遺物集中箇所1を検出した。

住居址は、「遺跡の歴史的環境」で述べた通り、本遺跡から出土した土器に「柏木明神1号炉西」の注記がみられることから、算用数字を用いて第2号竪穴住居址の番号から付した。

圃場整備区域の関係で完全に調査できた竪穴住居址は3軒（5・6・8号）だけである。



第4図 グリッド配置図 (1 : 800)

すでに、個人住宅の壁土として長年にわたりロームが採取されたことで、その多くが破壊されていた3軒（2～4号）、圃場整備の区域外に続くものが2軒（7・9号）である。伴出遺物からみると中期中葉の貉沢期～井戸尻期の環状ないしは馬蹄形集落址の北東部分にあたるが、主体となる時期は新道期のようである。

堅穴は、落ち込みの状態と規模から第10号堅穴住居址と認定し精査を進めた。整理作業を進めるなかで炉址が検出できなかったこともあり、住居址とは異なる性格を有する遺構との考えに落ち着き、便宜的に堅穴1と呼ぶことにした。なお、堅穴の名称については、昭和51年度に中央自動車道の建設に先立って発掘調査が行われた居沢尾根遺跡で使用している。それをみると、堅穴の規模は住居址とほぼ同様であるが、炉址が検出できなかった本遺跡の堅穴と類似している。違う点をあげると、本址からはわずかな遺物が出土しただけであるが、居沢尾根遺跡では数多い完形土器が出土していることである。なお、調査記録類には「第10号堅穴住居址」遺物に「10住」と注記してある。

小堅穴は、住居址同様に尾根上の平坦部から緩やかな北斜面で検出した。なお、斜面がきつい所でも検出したが、全て陥し穴でありその在り方には注目できよう。遺物が伴出したことにより帰属時期を明らかにできたものはないが、本遺跡は縄文時代と近世が複合していたが、近世は墓塚だけであり、それも狭い限られた範囲に設けられていた。したがって、ここでは遺物が伴出しなかった小堅穴も縄文時代と考えておきたい。

また、北斜面からは数多い土器と石器が集中出土した。当地方における集落址の居住区域を外れた北斜面等でしばしば見られる土器・石器などの廃棄場所である。本遺跡では北斜面をごみ捨て場として利用していたことが明らかになったが「土器集中箇所1」と呼称し調査を行った。前記した堅穴同様に整理作業を進める過程で、石器も数多く出土していることから名称を「遺物集中箇所1」に変更したが、調査記録類には「土器集中箇所1」遺物に「土集1」と注記してある。

近世の墓塚4基を検出したが、全て斜面のきつい所にあり対象外とした。

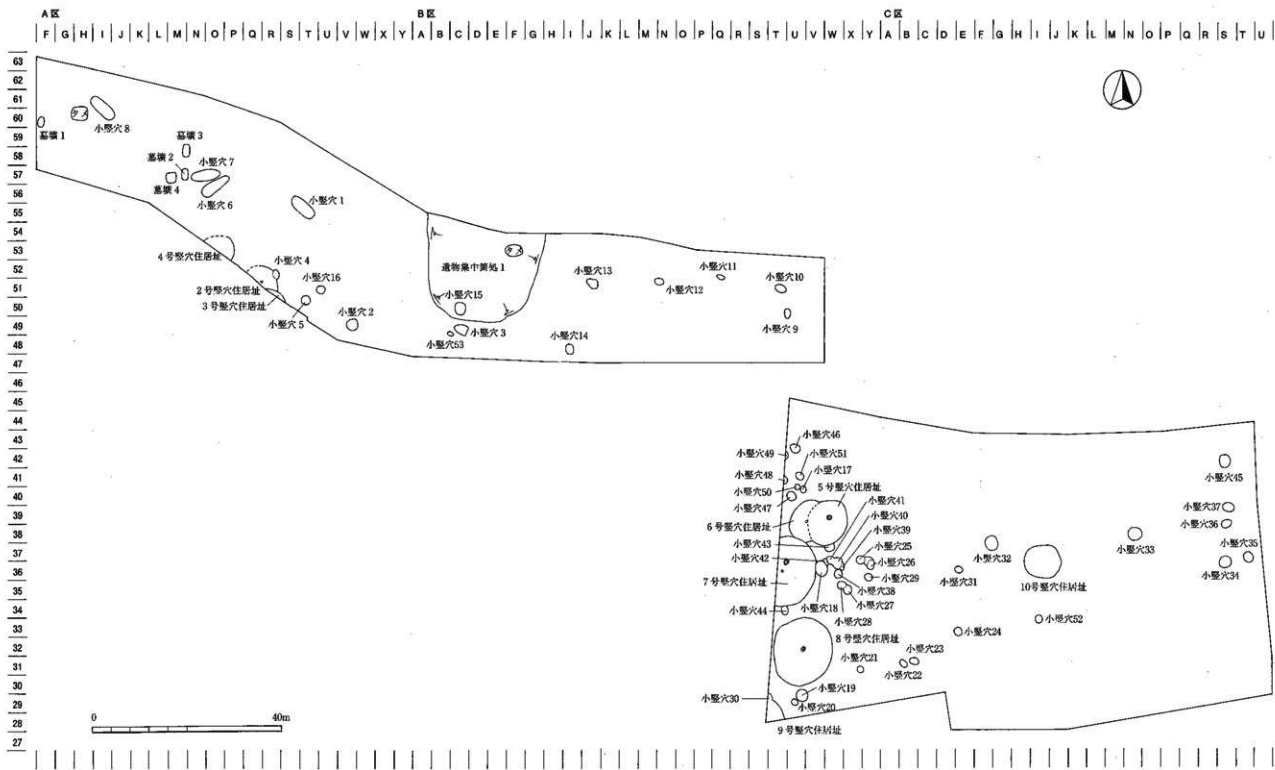
検出した遺構をまとめると次の通りで、分布状況は第5図「遺構配置図」に示した。

縄文時代

中期堅穴住居址	8軒
堅穴	1基
小堅穴	53基（内4基は陥し穴）
遺物集中箇所	1

近世

江戸時代墓塚	4基（対象外）
--------	---------



第5图 遺構配置图 (1:400)

IV 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

本調査で検出した竪穴住居址は8軒で、尾根上の平坦部から緩やかな北斜面で検出した。遺跡全域からみたら限られた僅かな範囲の調査であり明確なことはいえないが、検出した遺構の分布状況から環状集落址が容易に推測できるものであった。

竪穴住居址の検出面はローム層直上としたが、遺物は検出面より上層の黒褐色土層からも出土している。

竪穴住居址の記述は概ね、検出位置、平面形、埋土の状況、内部施設、出土遺物の順としたが、遺物については、整理期間の関係で土器・石器とも器種別出土数を記載したが、小形剥片石器、両極剥片は剥片とした。土器の遺構間接合については、破片数の多い遺構に図示してある。

第2号竪穴住居址(第5・6・8図、写真4・5)

BQ-52・53、BR-52・53グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址と思われるが、すでに南側の半分程は土採りにより破壊されていた。第3号竪穴住居址および小竪穴4と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。

埋土は薄いですが、土採りで断ち切られた面の観察では、逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没と考えられるものである。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたが、破壊された範囲が広く明確なことは不明であるが、径(380)cm程の円形であったものと思われる。壁は、東壁は13cm、北壁は10cmと低いですが、ほぼ垂直に立ち上がり普通である。周溝は、東壁の直下に幅11cm前後で深さ6cm位のものが部分的にみられるだけである。床面は、ほぼ平らのタタキ床で良好である。柱穴は、4基検出した。炉址北のピットは新しいもので性格は不明である。炉址は、中央奥壁よりに埋燗炉があり、埋設土器を中心に広い範囲が焼土化していた。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の土器1点(第8図1)と破片4点(2~5)を図示した。1は炉体土器で、貉沢期に特徴的にみられる鉢で底面を欠損するが、人為的に抜かれたものと思われる。2は浅鉢の口縁部破片である。

石器は、黒曜石の剥片1点である。

第3号竪穴住居址（第5・6・8図、写真4）

BR-50・51、BS-50・51グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址と思われるが、やはり南側は土採りにより破壊されていた。第2号竪穴住居址と重複するが、新旧関係はわからないままである。

埋土は薄く明確なことは不明であるが、土採りで断ち切られた面の観察では、逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没と考えられるものである。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたが、遺存した範囲があまりにも少なく規模を推定することは困難である。壁は、7cmと低いうえにだらだらと立ち上がり良くない。床面は、ほぼ平らで部分的にタタキ床も認められたがあまり良くない。柱穴は、1基検出したが、炉址は、欠損部にあったものと思われ検出できなかった。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の土器1点（第8図6）を図示したが、破片から図化した深鉢の下胴部である。

石器は、黒曜石の剥片2点とその他の剥片1点である。

第4号竪穴住居址（第5・6図）

BN-53、BO-53・54、BP-52-54グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址と思われるが、やはり南側の半分位は土採りですでに破壊されていた。

南東部で重複が認められたが、重複する遺構の残存部分があまにも少く、性格不明の遺構との重複となるが、掘り込みの在り方から住居址の可能性を捨て切ることができないでいる。

埋土は薄く明確なことは不明であるが、土採りで断ち切られた面の観察では、逆三角堆土と三角堆土の発達の認められた自然埋没と考えられるものである。

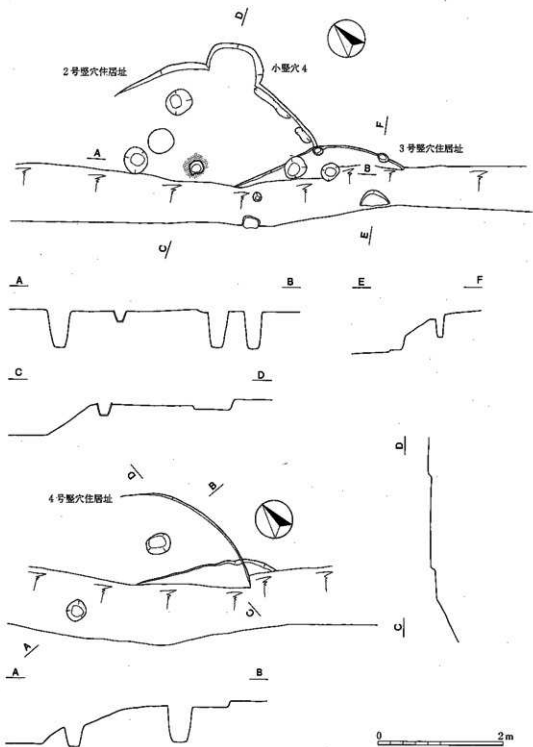
竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたが、遺存した範囲は少ないが規模を推測すると径(330)cm程と思われる。壁は、7.5cmと低いうえにだらかに立ち上がり良くない。床面は、ほぼ平らのタタキ床で比較的良い。柱穴は2基検出しただけである。

出土した遺物は、土器は皆無で石器が僅かにあるだけである。

石器は、黒曜石の剥片1点とその他の剥片1点である。

第5・6号竪穴住居址

第5号竪穴住居址と第6号竪穴住居址は重複していた。埋土の観察は、第5号から第6



第6图 第2·3·4号竖穴住居址·小竖穴4实测图(1:60)

号竪穴住居址を通した東西方向で行い、逆三角堆土と三角堆土の発達認められた自然埋没と考えられるものである。その埋土をⅠからⅨ層に細分したが、おおまかな観察結果は次の通りである。

- Ⅰ層 ローム細粒と炭化物を包含する黒色土である。
- Ⅱ層 ローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土である。
- Ⅲ層 やはりローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土で、Ⅱ層より黒色は強くなる。
- Ⅳ層 この層もローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土であるが、Ⅱ層・Ⅲ層より炭化物が大きくなる上にその包含量も多い。
- Ⅴ層 ロームの細粒・炭化物および焼土を包含する黄褐色土。
- Ⅵ層 ロームの細粒と炭化物を包含する黄褐色土であるが、Ⅳ層より炭化物の含包量は少ない。
- Ⅶ層 ローム
- Ⅷ層 ロームの細粒と炭化物を包含する黄褐色土で、Ⅱ層に近いがロームの細粒が多くそのため黄色が強い。
- Ⅸ層 やはりロームの細粒と炭化物を包含する黄褐色土であるが、Ⅷ層より黄色が強い。炭化物は少なくなる。

第5号竪穴住居址（第5・7・8・9・10・47図、写真6～9）

CV-37～39、CW-37～40、CX-38・39グリッドに跨る楕円形を呈する竪穴住居址である。第6号竪穴住居址と小竪穴43と重複していたが、本址が新しく第6号竪穴住居址が古い。小竪穴43との新旧関係は明確にできなかった。

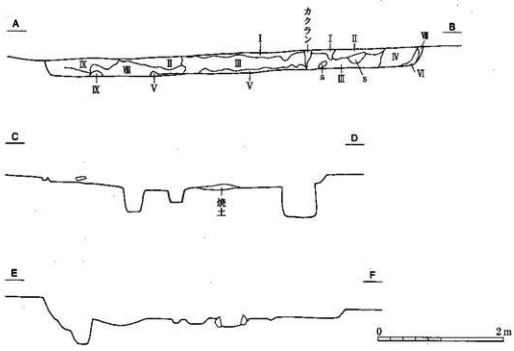
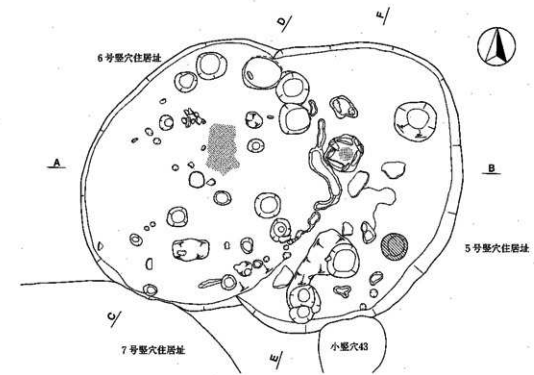
竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたが、大きさは長径482cm、短径（380）cmを計る。壁は、東が36.5cm、南は24cm、北は21cmを計るが、なだらかに立ち上がりあまり良くない。床面は、ほぼ平らのタタキ床で良好である。柱穴状のものは多いが主柱穴を特定することはできない。炉址は、住居中央やや奥壁よりに方形石囲炉がある。扁平状の石を立て構築したもので、炉内の規模は30×30cmである。

出土した遺物は、少ないが土器・石器・土製品がある。

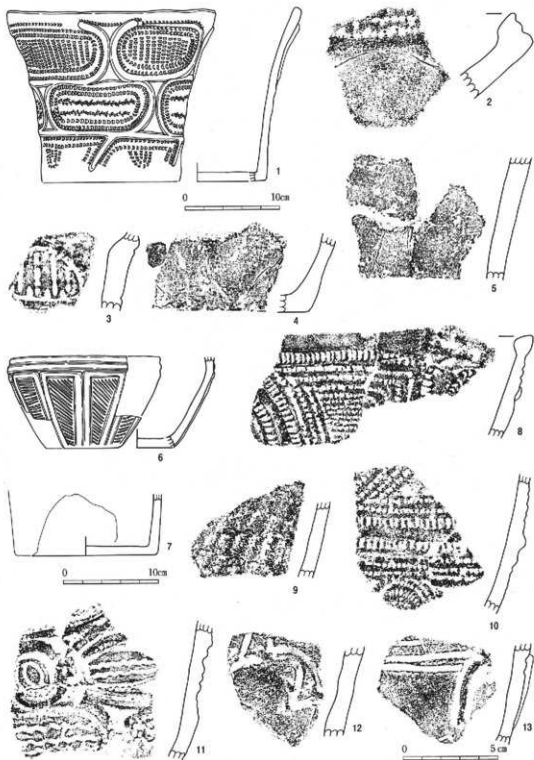
土器は、縄文時代中期中葉の土器1点（第8図7）と破片14点（8～13、第9図14～21）を図示した。

石器は、石鏃1点（第10図34）、両極石核1点（35）、打製石斧4点（42）、原石1点、黒曜石の剥片34点とその他の剥片8点である。

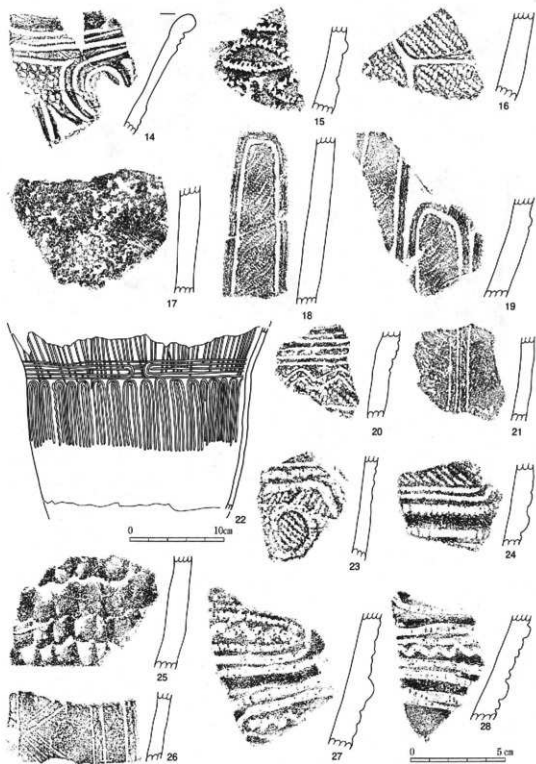
土製品は、土器破片利用の土製円盤1点（第47図1）である。



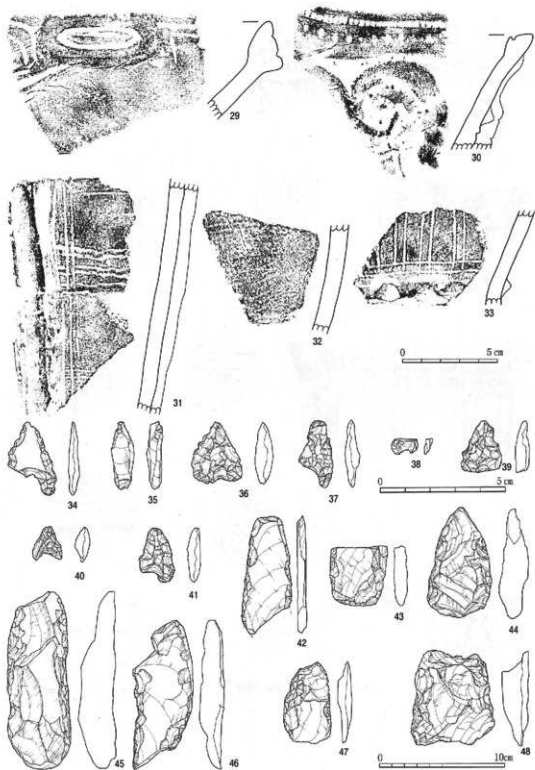
第7図 第5・6号壑穴住居址実測図 (1:60)



第8图 第2·3·5号竖穴住居址出土土器实测图·拓影(1·6·7 1:4, 2~5·8~13 1:2)



第9图 第5·6号窑穴住居址出土土器实测图·拓影 (14~21·23~28 1:2, 22 1:4)



第10图 第6号竖穴住居址出土石器拓影、第5·6·9号竖穴住居址·1号竖穴
出土石器实测图 (29~33 1:2, 34~41 2:3, 42~48 1:3)

第6号竪穴住居址(第5・7・9・10図、写真6～8・10)

CU-38～40、CV-38～40グリッドに跨る楕円形を呈する竪穴住居址である。第5号竪穴住居址と重複していたが、本址が旧く第5号竪穴住居址が新しい。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので、大きさは長径(455)cm、短径(380)cmを計る。壁は、西で19cm、南で31cm、北で14.5cmを計り、ほぼ垂直に立ち上がり良好である。床面は、ほぼ平らのタタキ床で良好である。周溝は、東側にみられる。柱穴は、支柱穴を明確にできない。炉址は、埋甕炉と地床炉がある。埋甕炉は住居ほぼ中央にあり、地床炉は埋甕炉より北東で検出した。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の土器1点(第9図22)と破片11点(23～28、第10図29～33)を図示した。22は炉体土器で口縁部と下胴部を欠損する。29は浅鉢の口縁部破片である。

石器は、石鏃4点(第10図36・37)、石錐1点、石匙?1点(46)、打製石斧3点(43～45)、横刃形石器4点、黒曜石の剥片39点(38)とその他の剥片7点である。

第7号竪穴住居址(第5・11～18・47図、写真11～15)

CT-34～38、CU-34～38、CV-35～38グリッドに跨るやや丸みを持つタマゴ形を呈する竪穴住居址であるが、約3分の1程は予定地外(未調査)になる。埋甕炉と石囲炉があり、支柱穴の配列および貼床を確認した柱穴のあり方から、同心円上建て直しが行われているものと思われる。

土層の観察面を用地境の南北方向に設定し精査を行った結果、逆三角堆土と三角堆土の発達認められた自然埋没と考えられるものであった。

おおまかな観察結果は次の通りである。

I層 表土。畑の耕作土である。

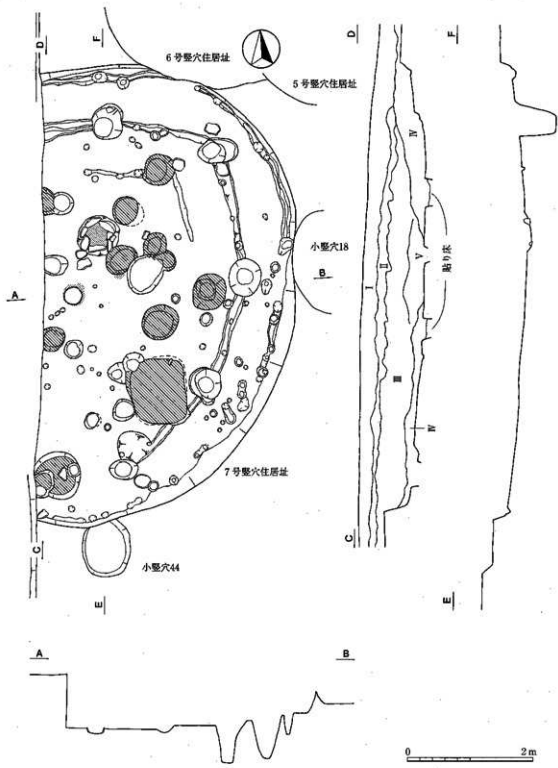
II層 ローム細粒を包含する黒色土。

III層 ローム細粒と炭化物を包含する褐色土。

IV層 ローム細粒と炭化物を包含する黄褐色土で、III層よりロームの包含量が多い。

V層 ローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので、大きさは長径730cm、短径(600)cmを計る極めて大きな家である。壁の状態は、ほぼ垂直に立ち上がり良好である。壁高は東が55cm、南は36cm、北は20cmを計る。床面は、この時期特有の手法をもつ住居址で、柱穴間を結ぶ周溝から外壁側が一段高く内側が低く床面に段差が設けられているが、入口部にあたる南側は床面に段差はなくゆるやかな傾斜になっている。全面タタキ床で堅い。周



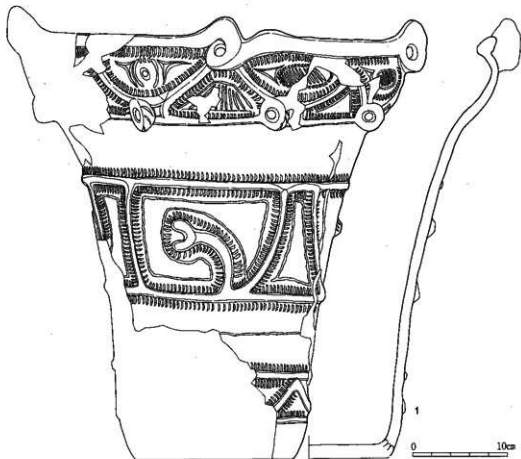
第11图 第7号壑穴住居址·小壑穴44实测图(1:60)

溝は、壁直下と柱穴を結ぶ線上にみられる。また、貼床が行われた柱穴を結ぶ線上にもみられるが、床面を作り直した際に僅かに残った状態である。この状況は旧住居址も同様な作りであったことを伺い知ることができる。

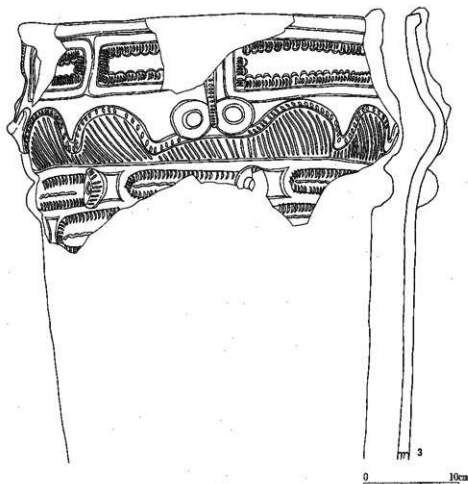
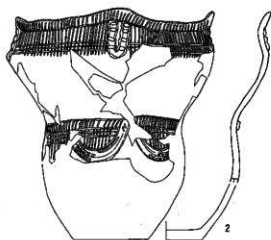
新竪穴住居址の主柱穴は6基で未調査部分に3基あるものと思われる。性格不明のピットもみられた。上面に貼床が認められたピット（第11図 スクリーントーン）を旧竪穴住居址のものと考えたが、柱穴と性格不明のものがある。住居の中央やや奥壁よりに円形石囲炉が構築されている。扁平状の石を立て構築したもので、炉内規模は30×28cmである。石囲炉の南には埋甕炉がある。旧竪穴住居址のものであろう。

出土した遺物は、土器・石器・土製品がある。

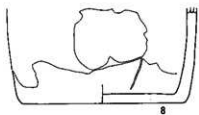
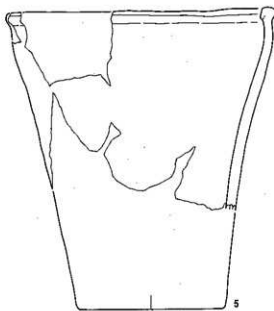
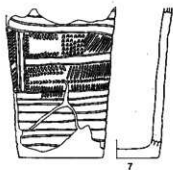
土器は多く、縄文時代中期中葉の10点（第12～14図、第15図9・10）と破片6点（11～15、第16図16）を図示した。1に遺物集中箇所1出土破片が接合した。2は平出第Ⅲ類A系統の構形文土器である。6は発見例の少ない形態で鉢と考えた。僅ではあるが内面



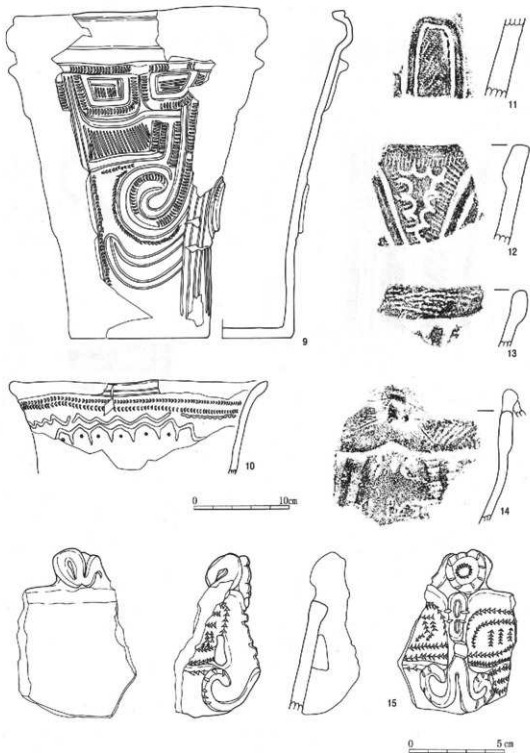
第12図 第7号竪穴住居址出土土器実測図その1（1：4）



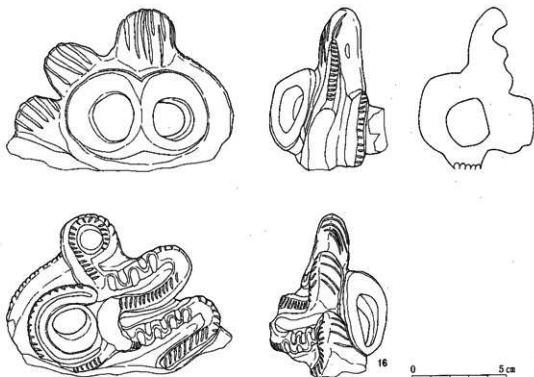
第13図 第7号聚穴住居址出土土器実測図その2 (1:4)



第14圖 第7号竪穴住居址出土土器実測図その3 (1:4)



第15図 第7号竪穴住居址出土土器実測図・拓影その4 (9・10 1:4、11~15 1:2)



第16図 第7号竪穴住居址出土土器実測図その5 (1:2)

に黒色顔料、外面に黒色顔料と赤色顔料が認められる。10は炉体土器で僅かに口縁部が残るが火熱のため脆くなっている。13・14は薄手の搬入土器で同個体と思われる。15は人体文の範疇にはいるものであり、16はみみずく把手である。

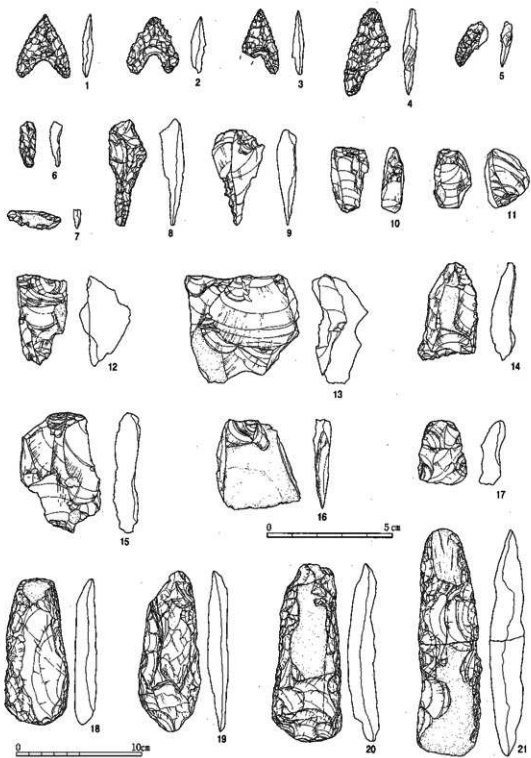
石器も多く第17・18図に示したが、石鎌5点(1~5)、石錐4点(6~9)、両極石核3点(10~12)、石匙3点(34・35)、打製石斧19点(18~29)、小形磨製石斧1点(37)、乳棒状石斧3点、横刃形石器10点(30~33)、石皿1点(36)、凹石・磨石類が12点、特殊磨石が1点、原石が2点、石核1点(13)、黒曜石の剥片300点、チャートの剥片1点、その他の剥片41点である。

21の打製石斧は遺構内における接合である。36の石皿は線刻が施された完形の優品である。

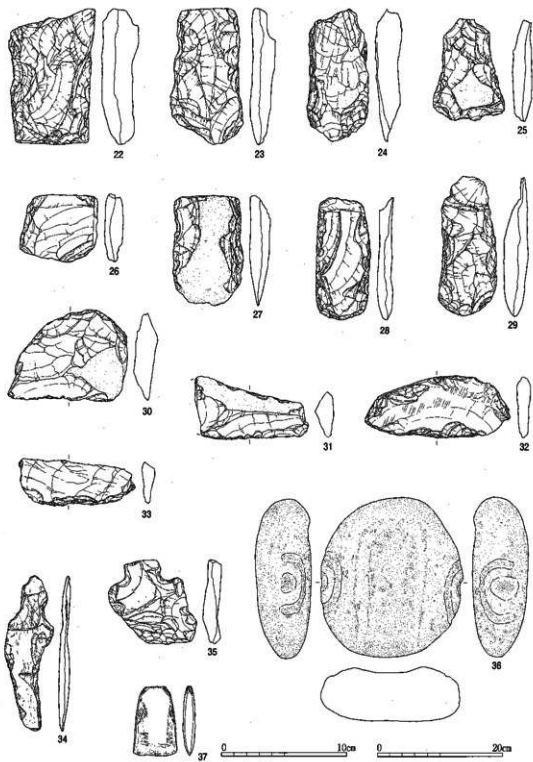
土製品は、土器破片利用の土製円盤1点(第47図2)である。

第8号竪穴住居址(第5・19~23図、写真16~20)

CT-30~33、CU-30~33、CV-30~33、CW-31~33グリッドに跨る楕円形を呈する竪穴住居址である。主柱穴の配列および貼床が認められた柱穴のあり方からみて、同心円



第17図 第7号整穴住居址出土石器実測図その1 (1~17 2:3、18~21 1:3)



第18図 第7号壑穴住居址出土石器実測図その2 (22~35・37 1:3、36 1:6)

上建て直しが行われたものであろう。

土層の観察面を南北方向に設定し精査を行った結果、それは逆三角堆土と三角堆土の発達の認められる自然埋没と考えられるものであった。おおまかな観察結果は次の通りである。

- I層 ローム細粒と炭化物を包含する黒色土。
- II層 ローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土。
- III層 ローム細粒・ローム粒および炭化物を包含する黄褐色土。ローム粒の径は0.5～3cmである。
- IV層 ローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土で、II層より黄色が強くなる。
- V層 ローム細粒・炭化物および焼土を包含する黒褐色土。
- VI層 ローム細粒・炭化物および焼土を包含する黄褐色土で、焼土の包含量は多い。

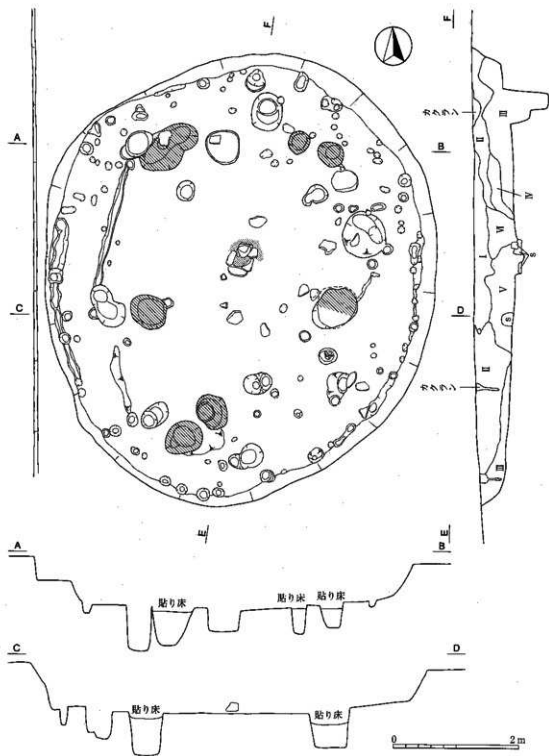
竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたもので、大きさは長径733cm、短径630cmを計る極めて大きな家で、この時期においては村内で一番大きな住居址である。壁の状態は、ほぼ垂直に立ち上がり良好であるが、ややなだらかに立ち上がる箇所もみられた。壁高は東が46cm、西は40cm、南は32cm、北は47cmを計る。不明瞭な箇所もみられるがこの時期独特の手法を持つ住居であり、床面に段差が設けられた作りである。壁から支柱穴を結ぶ周溝までが高く、その内側は低くなる。住居の入り口部が設けられていたと思われる南側に段差はなく、ゆるやかな傾斜をもっている。全面タタキ床で堅い。周溝は壁直下と柱穴を結ぶ線上に部分的にみられる。

新住居址の支柱穴は7基である。柱穴以外のピットは性格不明である。上面に貼床が認められたピット（第19図 スクリーントーン）を旧住居址のものと考えた。柱穴と性格のものがある。住居のほぼ中央に方形石囲炉が構築されている。扁平状の石を立て構築したもので、炉内規模は25×30cmである。

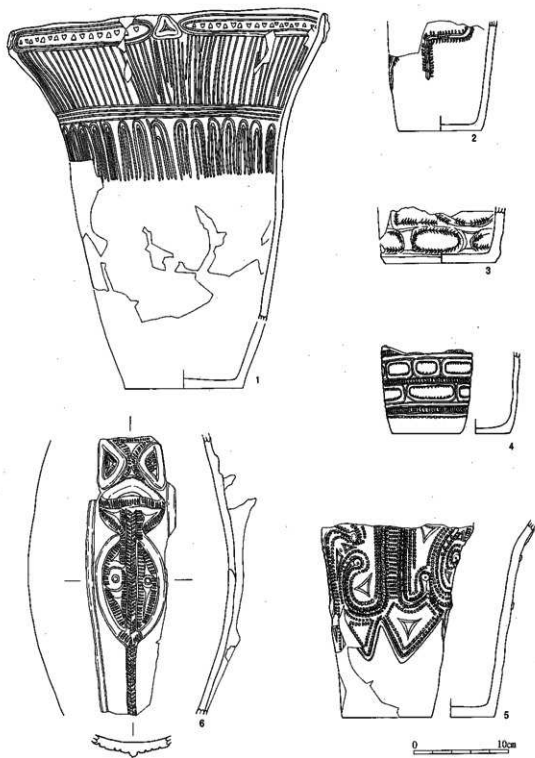
発見した遺物は、土器と石器がある。

土器は多く、縄文時代中期中葉の7点（第20図1～6、第21図7）と破片7点（8～14）を図示した。6は胎土・焼成および形態などから有孔鈔付土器と考えたが、蛇体文が施されている。8・9は薄手の搬入土器である。

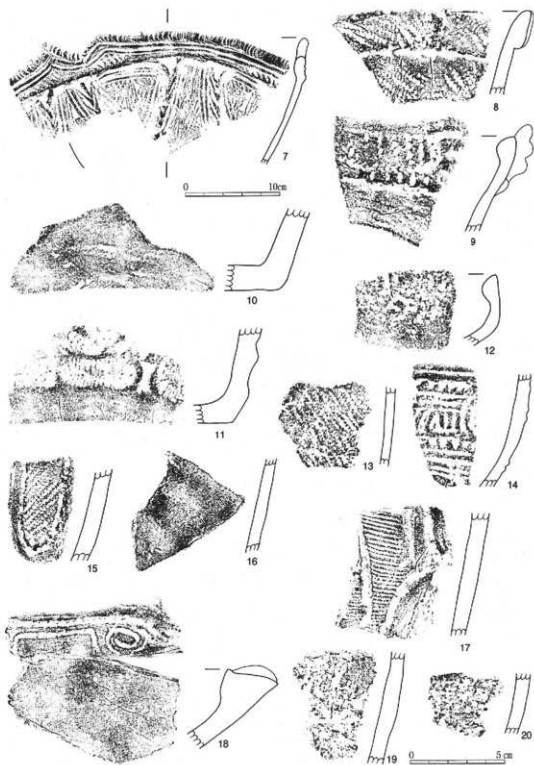
石器も多く第22・23図に示したが、石鏃15点（1～13）、石錐2点（14）、削器10点（15～22）、両極石核6点（23～26）、打製石斧21点（33～43・45）、磨製石斧1点（46）、乳棒状石斧2点、横刃形石器17点（44）、凹石・磨石類が11点、石核1点、黒曜石の剥片389点、その他の剥片35点である。



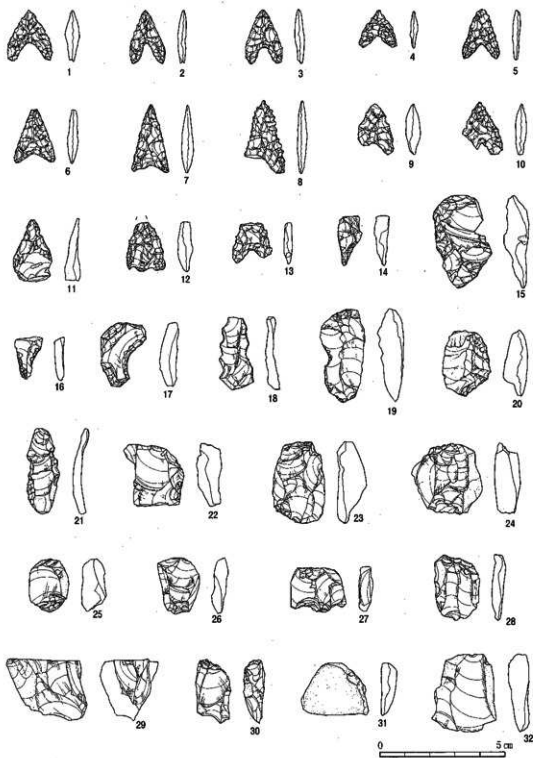
第19圖 第8号壑穴住居址実測圖 (1:60)



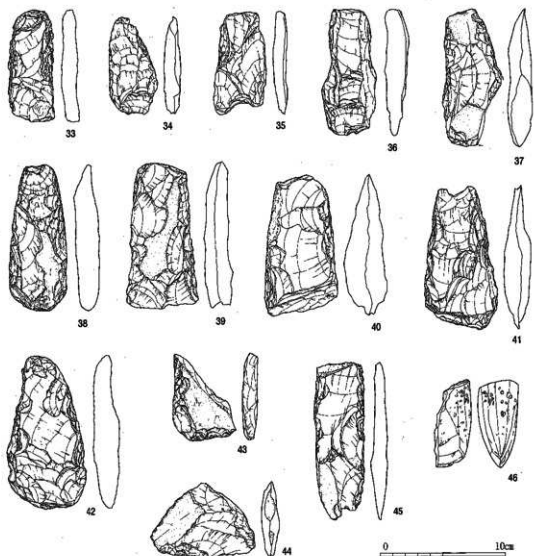
第20圖 第8号整穴住居址出土土器実測圖（1：4）



第21圖 第8・9号聚穴住居址・1号聚穴出土土器実測圖・拓影（7 1：4、8～20 1：2）



第22図 第8号竪穴住居址出土石器実測図その1 (2:3)



第23図 第8号竪穴住居址出土石器実測図その2 (1:3)

第9号竪穴住居址 (第5・10・21・24図、写真21)

CS-28・29、CT-28・29グリッドに跨って検出された楕円形を呈する竪穴住居址と思われるが、わずかな範囲を調査しただけであり、その多くは予定地外(未調査)となる。なお、小竪穴30と重複しているが、新旧関係は明確にできなかった。

土層の観察面を用地境の南北方向に設定し精査を行った結果、逆三角堆土と三角堆土の発達が認められる自然埋没と考えられるものであった。

竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたものであるが、調査できた範囲があまりにも少なく規模を推定することはできない。壁の状態は、比較的なだらかに立ち上がりあま

り良くない。壁高は32cmを計る。壁直下には周溝が見られる。幅は10cm前後で深さは深い所で10cmを計り、周溝内には小ビットがみられる。柱穴の南にも周溝がみられその幅は5～25cm、深さは深い所で9cmである。調査できた範囲は狭く明確のことはわかっていないが、周溝のあり方からみて、第7号竪穴住居址と同様の手法を有する住居であろう。床面はしっかりしたタタキ床である。検出したビット1基は柱穴であろう。

発見した遺物は、土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の土器破片4点(第21図15～18)を図示した。16は有孔鈔付土器と思われ内面に黒色顔料が塗られている。18は浅鉢である。17は中期後葉期で混入したものである。

石器は、石鏃1点(第10図39)、打製石斧2点(47・48)、黒曜石の剥片6点である。

(2) 竪穴

竪穴の名称については、住居址に不可欠の炉址が検出できなかったこと、小竪穴と呼ぶには規模が大きいことから使用したものである。

1号竪穴(第5・21・24・47図、写真22・23)

DH-36・37、DI-36・37、DJ-36・37のグリッドに跨る。その規模から円形を呈する竪穴住居址と考え精査を行った。しかし、炉址を検出することはできなかった。住居址の認定条件の一つである炉址の有無からみると、住居址以外の施設と考え1号竪穴と呼称した。

土層観察面を東西方向に設定し精査を行った結果、すでに埋土は薄く明確ではなかったが、逆三角堆土と三角堆土の発達が認められる自然埋没と考えられるものであった。

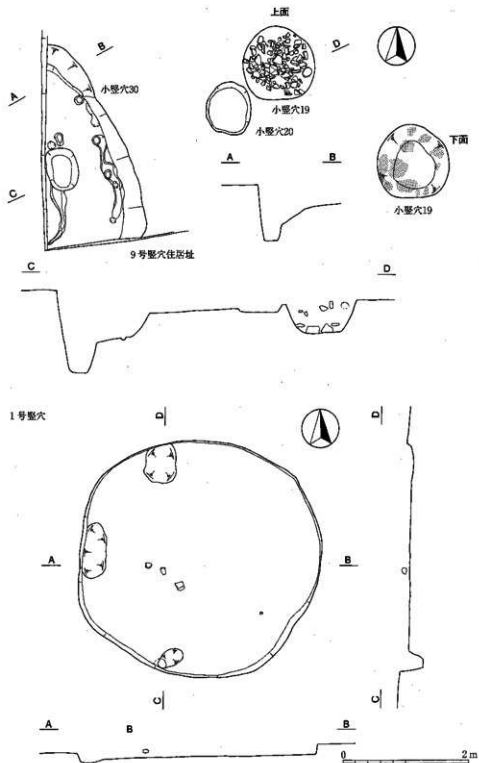
竪穴住居址は、ローム層中に構築されていたものであり、その大きさは長径388cm、短径378cmを計る。壁の状態は、ほぼ垂直に立ち上がり普通である。壁高は東が15.5cm、西は9cm、南は15.5cm、北は4cmと低い。床面はほぼ平らで部分的にタタキ床もみられたが、総体的には軟弱である。ビット3基を検出したが浅いものばかりで、柱穴に特定できるものではなく性格は不明である。

発見した遺物は少ないが、土器・石器・土製品がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片2点(第21図19・20)を図示した。

石器は、石鏃2点(第10図40)、黒曜石の剥片22点、その他の剥片2点である。

土製品は、土器破片利用の土製円盤2点(第47図3・4)である。



第24图 第9号整穴住居址·1号整穴·小整穴19·20·30实测图

(3) 小竪穴

53基の小竪穴を調査したが、遺物が伴出したものは少なく縄属時期、性格などを明らかにできたものは少ない。

小竪穴 1・6・7・8

北斜面で検出した小竪穴 1・6・7・8の4基は、その形態から陥し穴と考えたものである。埋土の観察面は短軸方向に設定している。

小竪穴 1 (第5・25・32・36図、写真24・25)

北斜面のBS-55・56、BT-55・56グリッドで検出した。

埋土は、第25図に示したようにレンズ状堆積が認められた自然埋没と思われるもので、土層の大まかな説明は次の通りである。

I層 ローム細粒を包含する黒褐色土。

II層 ローム細粒を包含する黒色土。

III層 ローム細粒を包含する黄褐色土。壁土が落下したと思われるロームと黒色土が交互にいり混じっている。細分することもできるが、ここでは1層と考えた。

IV層 ローム細粒とロームブロック。

V層 ローム細粒を包含する黒色土。IV層とほぼ同じであるが黒色が強い。

平面形は297×112cmの隅丸長方形を呈し、深さ123cmで、底面は平らで小穴がほぼ垂直に5基穿たれている。壁の立ち上がりは底から29～40cmはしっかりしていたが、それより上はスリ鉢状になり、壁土の落下が著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底面の形状に近いものであったと思われる。底面の規模は274×42cmである。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片24点が出土したが、6点(第32図1～6)を図示した。

石器は、石鏃1点、乳棒状石斧1点(第36図9)、原石2点、黒曜石の剥片6点である。

小竪穴 6 (第5・26・32図、写真26～28)

北斜面のBN-56、BO-56・57、BP-56・57グリッドで検出した。

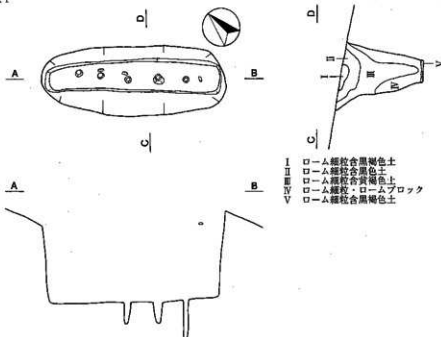
埋土は、第26図に示したようにレンズ状堆積が認められた自然埋没と思われるもので、土層の大まかな説明は次の通りである。

I層 ローム細粒を包含する黒褐色土。

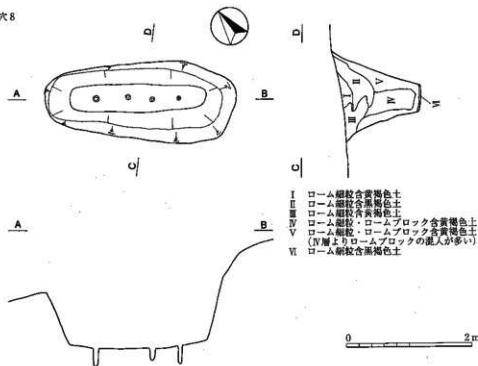
II層 ローム細粒とロームブロックを包含する黄褐色土。

III層 やはりローム細粒とロームブロックを包含する黄褐色土で、II層よりローム細粒と

小墜穴1



小墜穴8



第25図 小墜穴1・8実測図 (1:60)

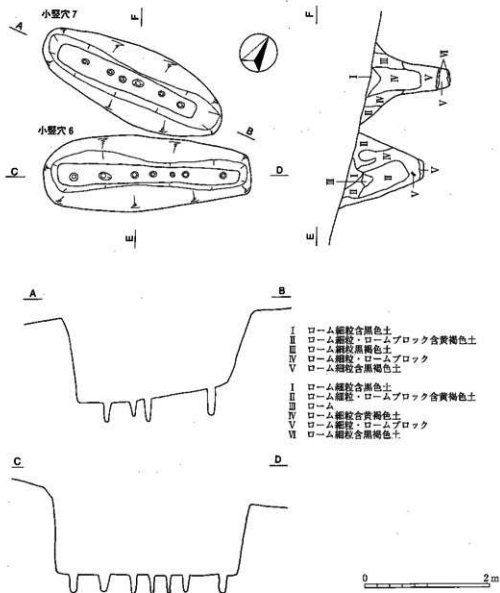
ロームブロックの包含量は多くボロボロしている。

IV層 ローム細粒を包含する黒褐色土で、I層より黒色は強い。

V層 ローム・ロームブロック。

VI層 ローム細粒を包含する黒色土。

平面形は332×121cmの隅丸長方形を呈し、深さ137cmで、底は平らで小穴がほぼ垂直に7基穿たれている。壁の立ち上がりは底から34~122cmはしっかりしているが、それより



第26図 小竪穴6・7実測図 (1:60)

上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。底面の規模は291×35cmである。

壁土がしっかりしていた底部近くには掘削痕が顕著に残っており、その観察によると鍬状の工具を使用していることが容易に理解できる状態である。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片11点が出土したが、3点（第32図15～17）を図示した。

石器は、剥片1点である。

小竪穴7（第5・26・33図、写真26・27・29）

北斜面のBN-57、BO-57グリッドで検出した。

埋土は、第26図に示したようにレンズ状堆積が認められた自然埋没と思われるもので、土層の大まかな説明は次の通りである。

I層 ローム細粒を包含する黒褐色土。小竪穴6のI層よりも黄色が強い。

II層 ローム細粒とロームブロックを包含する黄褐色土。

III層 ローム。

IV層 ローム細粒を包含する黄褐色土。

V層 ローム細粒とロームブロック。

VI層 ローム細粒を包含する黒褐色土。I層とほぼ同じである。

平面形は311×121cmの隅丸長方形を呈し、深さ140cmで、底は平らで小穴がほぼ垂直に6基穿たれている。壁の立ち上がりは底から78～118cmはしっかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。底面の規模は240×37cmである。

壁土がしっかりしていた底部近くは、小竪穴6同様に掘削痕が顕著に残っており、その観察では鍬状工具を使用していることが容易に理解できる状態である。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の小破片3点土器が出土したが、2点（第33図18・19）を図示した。

石器は、黒曜石の原石1点（第36図2）と剥片1点で、原石（転石）は重さ140gである。

小竪穴8（第5・25・33図、写真30～32）

北斜面のBH-61、BI-60・61、BJ-60グリッドで検出した。

埋土は、第25図に示したようにレンズ状堆積が認められた自然埋没と思われるもので、土層の大まかな説明は次の通りである。

- I層 ローム細粒を包含する黄褐色土で、II層よりも黄色味が強い。
- II層 ローム細粒を包含する黒褐色土。
- III層 ローム細粒を包含する黄褐色土。
- IV層 ローム細粒とロームブロックを包含する黄褐色土で、III層とはほぼ同じであるが、ロームブロックの違い。
- V層 ローム細粒とロームブロックを包含する黄褐色土で、IV層よりロームブロックの含量が多い。
- VI層 ローム細粒を包含する黒褐色土。

平面形は305×132cmの隅丸長方形を呈し、深さ114cmで、底は平らで小穴がほぼ垂直に4基穿たれている。壁の立ち上がりは底から77～102cmはしっかりしているが、それより上はスリ鉢状となり、壁土の落下は著しかったようである。この状態からみると、当時の平面形は底の形状に近いものであったと思われる。底面の規模は216×45cmである。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片1点（第33図20）である。

石器は、黒曜石の原石2点（第36図3・4）で、原石（転石）は重さ181.7gと184.5gである。

このような陥し穴は縄文時代早期に多いようである。村内では、昭和53年度に村道改良工事に先立って実施した白ヶ原遺跡（原村遺跡番号17）で検出している。それらに比べると極めて細長い陥し穴であり、早期のものとは違っている上に、埋土中から中期中葉の土器破片が出土している。同様の陥し穴は南に隣接する前尾根遺跡（原村遺跡番号20）や北に隣接する程久保遺跡（同15）で発見されている。

小竪穴2（第5・27図）

第2・3号竪穴住居跡の東に位置するBV-49・BW-49グリッドで検出した。平面形は118×111cmの不整形円形を呈し、壁の立ち上がりはあまり良くない。底面は平らで深さ6cmと浅い。

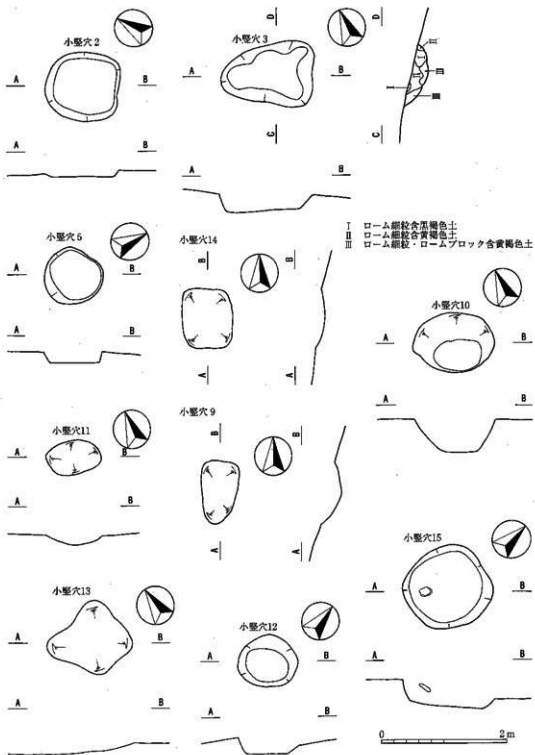
遺物の発見は皆無である。

小竪穴3（第4図5・27図）

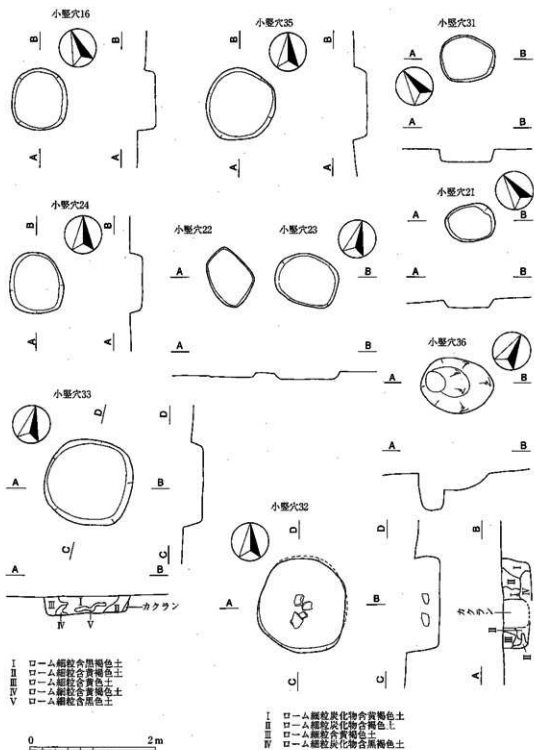
小竪穴2の東に位置するCC-48・49グリッドで検出した。

埋土の観察を自然傾斜の南北方向で行った結果、第27図に示したようにレンズ状堆積が認められる自然埋没と思われるものである。おおまかな観察結果は次の通りである。

- I層 ローム細粒を包含する黒褐色土



第27図 小壑穴2・3・5・9～15実測図(1:60)



第28図 小壺穴16・21~24・31~33・35・36実測図(1:60)

Ⅱ層 ローム細粒を包含する黄褐色土

Ⅲ層 ローム細粒とローム粒を包含する黄褐色土であるが、ローム粒の径は1～2cm位である。

平面形は147×107cmの不整三角形を呈し、壁の立ち上がりは良くない。底面は丸く深さ22cmである。埋土中に小礫が包含されていた。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴4 (第5・6・32図)

BR-51・52グリッドで検出したが第2号竪穴住居址と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は92×(65)cmの不整楕円形で、底面はやや丸くなり深さ15.5cmと浅い。

出土した遺物は、土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片35点が出土し、6点(第32図7～12)を図示した。

石器は、黒曜石剥片11点、その他剥片1点である。

小竪穴5 (第図5・27・32図)

第3号竪穴住居址の東に位置するBT-50・51グリッドで検出した。平面形は90×90cmの不整円形で、南壁の立ち上がりは良くないが、底面はほぼ平らで深さ18cmと浅い。

出土した遺物は、少ないが土器がある。縄文時代中期中葉の小さな破片7点が出土し、2点(第32図13・14)を図示した。

小竪穴9 (第5・27図)

北斜面に位置するCT-49・50、CU-49・50グリッドで検出した。平面形は101×62cmの不整隅丸三角形である。壁はだらだと立ち上がり、底面は丸く深さ7cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴10 (第5・27・33図)

北斜面で小竪穴9の北に位置するCT-51グリッドで検出した。平面形は130×97cmの楕円形で、北壁の立ち上がりは良くない。底面は丸く深さ31cmである。

出土した遺物は、少ないが土器がある。縄文時代中期中葉の小さな破片3点が出土し、1点(第33図21)を図示した。

小竪穴11 (第5・27図)

北斜面で小竪穴10の西に位置するCQ-51・52グリッドで検出した。平面形は90×54cmの楕円形で、底面は丸く深さ27cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴12 (第5・27・33図)

北斜面で小竪穴11の西に位置するCM-51、CN-51グリッドで検出した。平面形は98×83cmの楕円形である。壁の立ち上がりなだらかである。底面は平らであるが深さ5cm浅い。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片7点が出土したが、2点(第33図22・23)を図示した。

石器は、黒曜石の剥片2点である。

小竪穴13 (第5・27図)

北斜面で小竪穴12の西に位置するCJ-51グリッドで検出した。平面形は118×104cmの不整形である。壁はだらだらと立ち上がり、底面は丸く深さ5cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴14 (第5・27図)

北斜面で小竪穴13の南に位置するCI-47・48グリッドで検出した。平面形は96×81cmの隅丸方形である。壁の立ち上がりは不明瞭で、底面は丸く深さ8cmと浅い。埋土中には35×20cmの平板石が包含されていた。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴15 (第5・27・33図)

北斜面で遺物集中箇所1の南外れで小竪穴14の西に位置するCC-50グリッドで検出した。平面形は133×132cmの円形で、底面は平らで深さ34.5cmである。壁際には18×12cmの礫が1点包含されていた。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の小さな破片2点(第33図24・25)である。

石器は、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴16 (第5・28図)

第2号竪穴住居址の東に位置するBT-51、BU-51グリッドで検出した。平面形は98×87cmの不整形である。底面はほぼ平らで深さは22cmである。

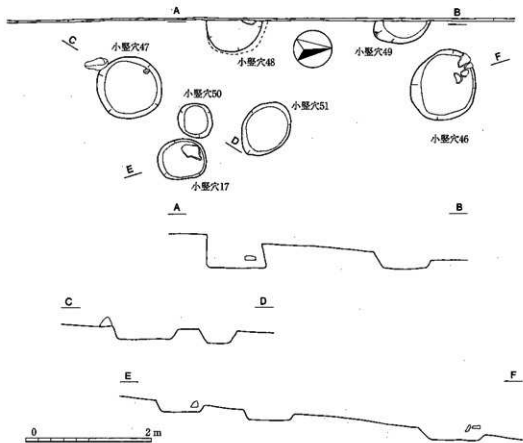
遺物の発見は皆無である。

小竪穴17 (第図5・29・33図)

第6号竪穴住居址の北に位置するCU-40グリッドで検出した。平面形は77×66cmの楕円形である。底面はほぼ平らで深さ10.5cmである。壁に接する状態で大きな礫1点包含されていた。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片8点が出土したが、4点(第33図26~29)を図示した。石器は、剥片1点である。



第29図 小竪穴17・46~51実測図(1:60)

小竪穴18・38・39・40・41・42

小竪穴18 (第5・30・33・36図、写真37)

CV-36、CW-36グリッドで検出したが第7号竪穴住居址と小竪穴42と重複している。重複による新旧関係は不明である。

埋土は、第30図に示したようにレンズ状堆積が認められた自然埋没と思われるもので、おまかな観察結果は次の通りである。

I層 ローム細粒を包含する黒色土。

II層 ローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土。

III層 ローム細粒と炭化物を包含する黄褐色土で、ローム粒の径は1cm位であるがその量は少ない。

IV層 ローム細粒とロームを包含する黄褐色土で、III層より黄色が強くなる。

V層 ソフトローム。

平面形は169×(135)cmの楕円形である。壁の立ち上がりはなだらかで、南壁は2段に立ち上がり良くない。底面はほぼ平らで深さ27.5cmである。埋土中には小礫が包含されていた。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片4点が出土したが、1点(第33図30)を図示した。

石器は、叩き石1点(第36図10)、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴38 (第5・30・34図、写真37)

第7号竪穴住居址の東に位置するCW-36グリッドで検出したが小竪穴39と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は(100)×84cmの楕円形である。壁はなだらかで南壁は2段に立ち上がっている。底面は平らで深さ32cmである。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片5点が出土したが、2点(第34図38・39)を図示した。39は浅鉢で3点の破片が接合し、内面には朱が塗られている。

石器は、図示しなかったが黒曜石の剥片1点である。

小竪穴39 (第5・30図、写真37)

第7号竪穴住居址の東に位置するCW-36、CX-36グリッドで検出したが小竪穴38・40と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は72×(72)cmの円形である。底面は平らで深さ19cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴40 (第5・30図、写真37)

第7号竪穴住居址の東に位置するCW-36・37グリッドで検出したが小竪穴39・41と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は115×(115)cmの不整円形である。底面は平らで深さ26.5cmである。

出土した遺物は、土器がある。縄文時代中期中葉の破片1点が出土したが、小さなもので図示できなかった。

小竪穴41 (第5・30図)

第7号竪穴住居址の東に位置するCW-36・37グリッドで検出したが小竪穴40・42と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は(100)×90cmの楕円形である。底面は平らで深さ17.5cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴42 (第5・30図)

第7号竪穴住居址の東に位置するCV-36・37、CW-36・37グリッドで検出したが小竪穴18・41と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は(79)×79cmの円形である。底面は平らで深さ26cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴19 (第5・24・33・36図、写真33~36)

第8号竪穴住居址の南に位置するCU-29・30、CV-29・30グリッドで検出した。平面形は118×115cmの円形である。

小竪穴検出時に掘り拳大の数多い礫を確認していながら、調査の不便で埋土および礫の摩没状況の観察をおこたり、検出面と底面の礫の遺存状況を示すことしかできなかった。

小竪穴に伴う集石は、当地方で産出する安山岩を用いたもので、第24図の上面検出図でみるように小竪穴内に広がり、付近に礫の散乱はみられなかった。礫は炭化物混じりの黒色土と伴っていたが、石の大きさは掘り拳人からそれよりやや大きなもので、大きさに規格性はみられないが、底面に密着する礫はやや大きなものである。集石を取り除くと実測図下面でみるように、壁面から底面は焼土化が認められた。

本址は、長峰遺跡(原村遺跡番号13)の小竪穴34に類似している。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の小さな破片2点が出土したが、1点(第33図31)を図示した。

石器は、打製石斧1点（第36図7）、黒曜石の剥片2点である。

小竪穴20（第5・24・33図）

第8号竪穴住居址の南で小竪穴19の南西に位置するCU-29グリッドで検出した。平面形は85×72cmの不整形である。壁の立ち上がりは良くない。底面はほぼ平らであるが深さ11.5cmと浅い。

出土した遺物は、土器がある。縄文時代中期中葉の小さな破片2点で、1点（第33図32）を図示した。

小竪穴21（第5・28図）

第8号住居址の東に位置するCX-31、CY-31グリッドで検出した。平面形は80×61cmの楕円形である。壁の立ち上がりは良くない。底面はほぼ平らで深さ11cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴22（第5・28図）

第8号竪穴住居址・小竪穴21の東に位置するDB-31グリッドで検出した。平面形は86×68cmの不整形である。壁の立ち上がりは良くない。底面はほぼ平らであるが深さ4cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴23（第5・28図）

第8号竪穴住居址・小竪穴22の東に位置するDB-31、DC-31グリッドで検出した。平面形は102×81cmの楕円形である。底面はほぼ平らで深さ12cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴24（第5・28図）

第8号竪穴住居址・小竪穴23の東に位置するDD-33、DE-32、DE-33グリッドで検出した。平面形は98×86cmの楕円形である。壁の立ち上がりは良い。底面は平らで深さ20cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴25・26

小竪穴25 (第5・30・33図、写真38)

第7号竪穴住居址の東に位置するCX-36・37、CY-36・37グリッドで検出したが小竪穴26と重複する。重複による新旧関係は不明である。

埋土は、第30図に示したがおおまかな観察結果は次の通りである。

- I層 ローム細粒と炭化物を包含する黒色土。
- II層 ローム細粒と炭化物を包含する褐色土。
- III層 ローム細粒と炭化物を包含する黒褐色土。
- IV層 ローム細粒と炭化物を包含する黄褐色土。

なお、総体的に小竪穴25の方が炭化物の包含量が多い。

平面形は(95)×95cmの円形である。壁の立ち上がりは良い。底面は平らで深さ21.5cmである。埋土中には23×12cmの礫が包含されていた。

出土した遺物は、土器がある。縄文時代中期中葉の破片8点が出土し、1点(第33図33)を図示した。

小竪穴26 (第5・30・33・36図、写真38)

第7号竪穴住居址の東に位置するCY-36・37グリッドで検出したが小竪穴25と重複する。重複による新旧関係は不明である。

埋土は、上記したとおりである。

平面形は(100)×(86)cmの楕円形である。検出時点では1基の小竪穴を考えたが、調査の結果、2基の小竪穴が重複しているように思われた。しかし、詳細については不明のため、ここでは1基の小竪穴として記載しておきたい。壁の立ち上がりは良い。底面は平らであるが2段になり、深さは深い所で35.5cm、浅い所は28.5cmである。埋土中には23×23cmと10×5cmの礫が包含されていた。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片2点(第33図34・35)である。

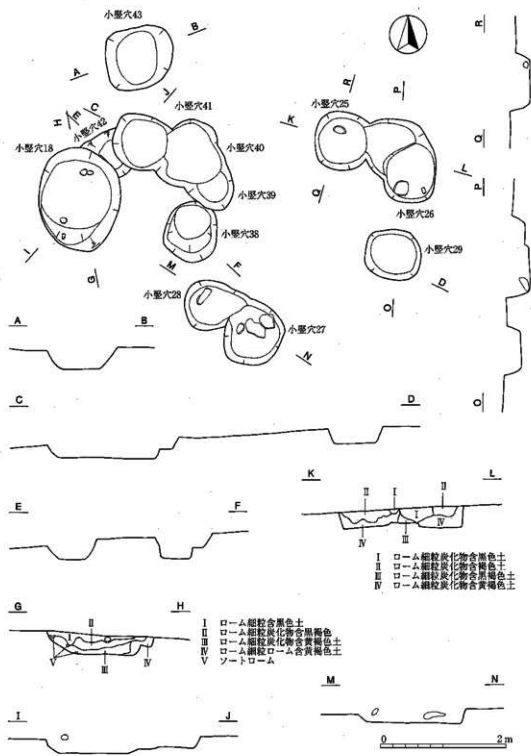
石器は、打製石斧1点(第36図8)で刃部と基部を欠損している。

小竪穴27・28

第7号竪穴住居址の東で小竪穴27と28と重複する。

小竪穴27 (第5・30図、写真39)

第7号竪穴住居址の東に位置するCX-35グリッドで検出したが小竪穴28と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は105×(94)cmの不整形円形である。底面は平ら



第30図 小堅穴18・25~29・38~43実測図 (1 : 60)

で深さ21.5cmである。底面には礫があり、大きさは18×11cm・41×20cm・24×22cmと大きなものばかり3点である。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴28 (第5・30図、写真39)

第7号竪穴住居址の東に位置するCW-35、CX-35グリッドで検出したが小竪穴27と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は(106)×80cmの楕円形である。底面は平らで深さ12cmである。壁際には32×10cmの柱状の礫が包含されていた。

出土した遺物は、少ないが黒曜石の剥片1点である。

小竪穴29 (第5・30・34図、写真38)

第7号竪穴住居址の東に位置するCY-35・36グリッドで検出した。平面形は90×80cmの楕円形である。底面は平らで深さ23cmである。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片3点が出土し、1点(第34図36)を図示した。

石器は、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴30 (第5・24図)

CT-29グリッドで検出したが第9号竪穴住居址と重複する。重複するうえに調査した範囲が少なく詳しいことは一切不明で重複による新旧関係もわからない。規模は推測できないが遺存する壁はなだらかに立ち上がり、底面を確認することはできなかったが現状の深さは28cmである。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片1点で出土したが、器外壁は剥落し図示することができなかった。胎土・焼成から平出第Ⅲ類Aの小破片と思われる。

石器は、黒曜石の剥片1点である。

小竪穴31 (第5・28図)

第7号竪穴住居址の東に位置するDE-36グリッドで検出した。平面形は88×76cmの楕円形である。底面は平らで深さ18cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴32 (第5・28・34・36図、写真40)

第7号竪穴住居址の東に位置するDF-37・38、DG-37・38グリッドで検出した。

埋土は、第28図に示したようにレンズ状堆積が認められた自然埋没と思われるものであるが、その真中辺りには、耕作により生じたと思われる攪乱穴がある。おおまかな観察結果は次の通りである。

I層 ローム細粒と炭化物を包含する黄褐色土。

II層 ローム細粒と炭化物を包含する褐色土。

III層 ローム細粒を包含する黄褐色土。

IV層 ローム細粒と炭化物を包含する褐色土であるが、炭化物はこの層に一番多い。

平面形は152×140cmの円形である。壁の立ち上がりは良く、北壁と東壁は部分的に袋状になる。底面は平らで深さ20cmである。埋土中に礫が4点含まれていた。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の小さな破片7点が出土し、1点(第34図37)を図示した。

石器は、打製石斧の接合資料1点(第36図5)は、火熱で破損したものである。黒曜石の剥片4点がある。

小竪穴33・34・35・37・45

小竪穴33 (第5・28図)

遺跡の東端にあたるDN-38、DO-38グリッドで検出した。

埋土は、第28図に示したようにレンズ状堆積が認められる自然埋没と思われるもので、大まかな観察結果は次の通りである。

I層 ローム細粒を包含する黒褐色土。

II層 ローム細粒を包含する黄褐色土。

III層 ローム細粒を包含する黄色土。

IV層 ローム細粒を包含する黄褐色土で、II層より黒色は強く粘質となる。

V層 ローム細粒を包含する黒色土。

平面形は140×138cmの円形である。壁の立ち上がりは良い。底面は平らで深さ20cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴34 (第5・31図)

遺跡の東端にあたるDS-36・37グリッドで検出した。平面形は131×122cmの不整形円形である。壁の立ち上がりは良い。底面は平らで深さ12cmと浅く、底面には18×18cmの礫が

1点包含されていた。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴35 (第5・28図)

遺跡の東端にあたる DT-36・37グリッドで検出した。平面形は115×110cmの不整形円形である。壁の立ち上がりは良い。底面は平らで深さ21cmである。

遺物の発見は皆無である。

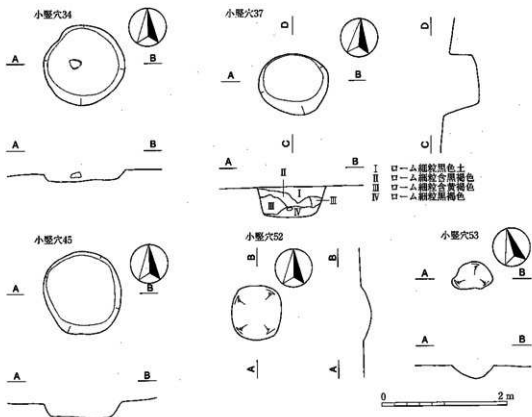
小竪穴37 (第5・31・36図)

遺跡の東端にあたる DS-39グリッドで検出した。

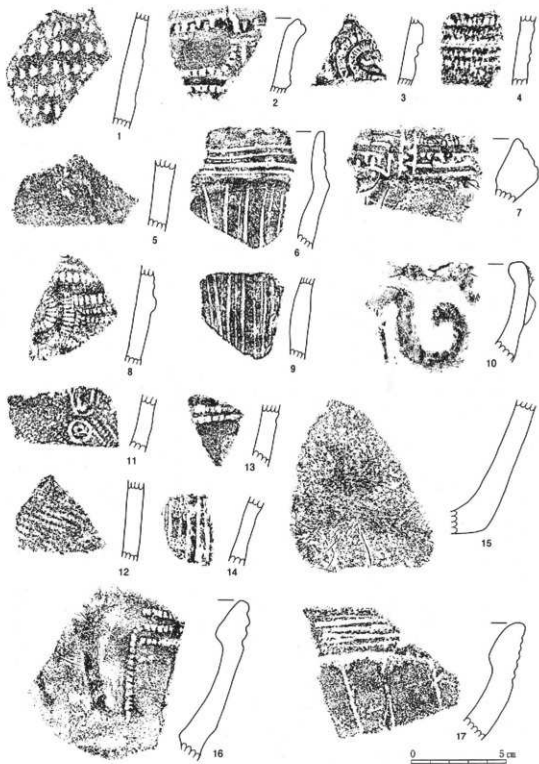
埋土は、第31図に示したようにレンズ状堆積が認められる自然埋没と思われるもので、おおまかな観察結果は次の通りである。

I層 ローム細粒を包含する黒色土。

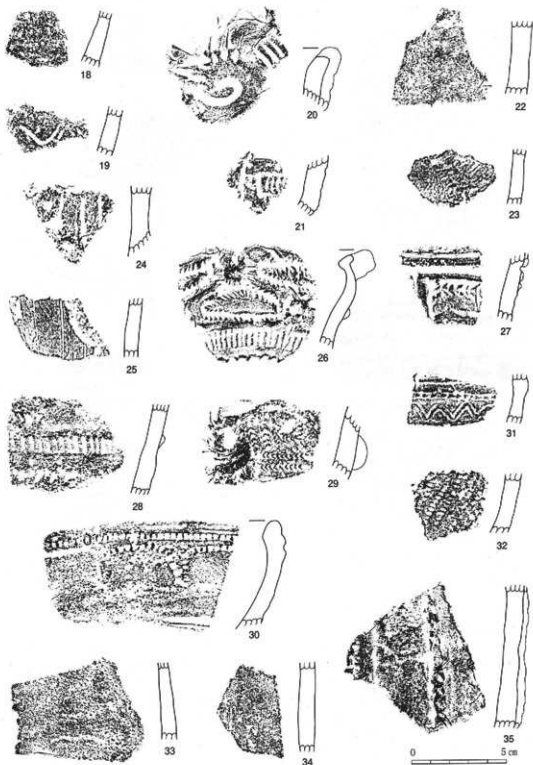
II層 ローム細粒を包含する黒褐色土。IV層よりさらさらしている。



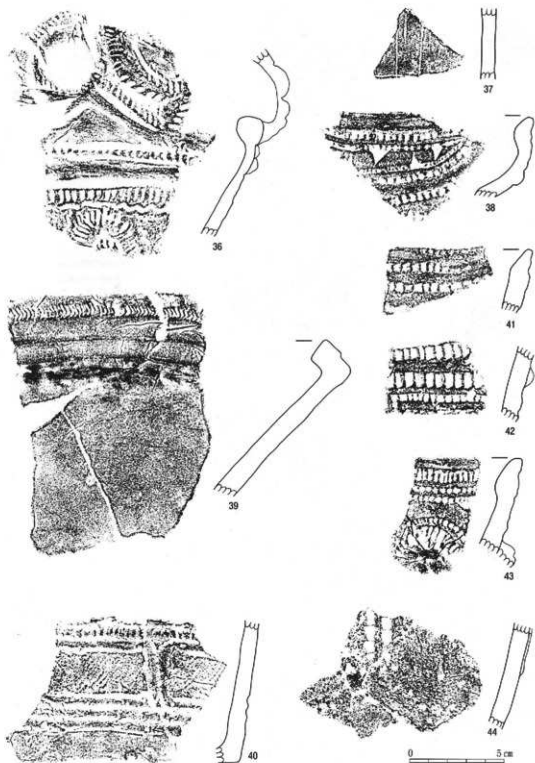
第31図 小竪穴34・37・45・52・53実測図 (1:60)



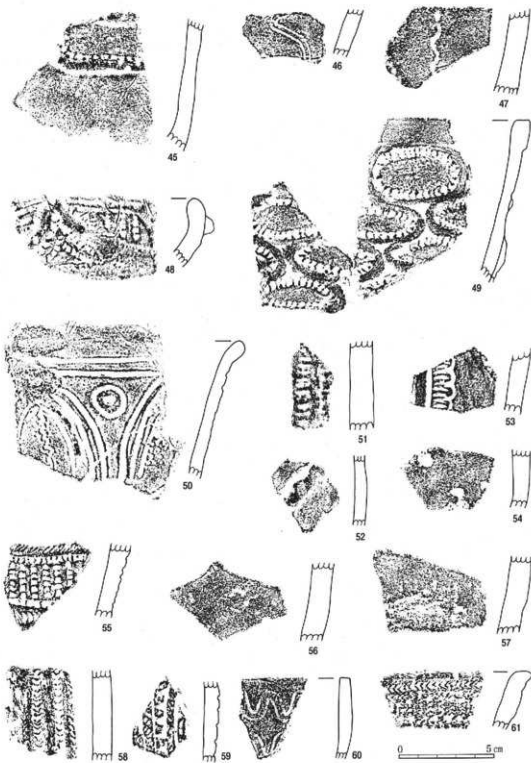
第32圖 小壘穴1·4·5·6出土土器拓影(1:2)



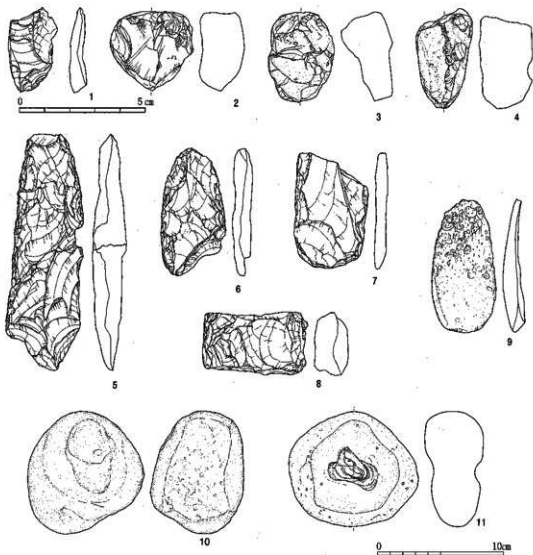
第33图 小颍穴7·8·10·12·15·17·18·19·25·26出土土器拓影(1:2)



第34圖 小墜穴小墜穴29·32·38·43·46出土土器拓影(1:2)



第35图 小竖穴46~51出土土器拓影(1:2)



第36図 小竪穴1・7・8・18・19・26・32・37・43・48出土石器実測図(1 2:3、2~11 1:3)

Ⅲ層 ローム細粒を包含する黄褐色土。

Ⅳ層 ローム細粒を包含する黒褐色土。粘質である。

平面形は112×99cmの楕円形である。壁の立ち上がりは良いが、南壁と東壁はややなだらかになる。底面は平らで深さ39cmとやや深い。

出土した遺物は、石器がある。凹石1点(第36図11)である。

小竪穴45(第5・31図)

遺跡の東端にあたるDS-41・42グリッドで検出した。平面形は135×121cmの不整形円形である。壁の立ち上がりは良いが、南壁はややなだらかになる。底面は平らであるが深さ

11cmと浅い。

遺物の発見は皆無である。

以上のように小竪穴33・34・35・37・45の5基は隣接するもので、平面形はやや不整になるものもみられるが基本的には円形を呈し、規模は同様で類似する点が多い。

小竪穴36 (第5・28図)

遺跡の東端にあたるDS-38・39グリッドで検出した。平面形は118×89cmの楕円形である。壁はだらだらと2段に立ち上がり状態は良くない。底面は検出面に比べると極めて小さくなり深さ66cmを計る。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴43 (第図5・30・34・36)

CW-37グリッドで検出したが第5号竪穴住居址と重複する。重複による新旧関係は不明である。平面形は110×(100)cmの円形である。壁の立ち上がりはあまり良くない。底面は平らで深さ36cmである。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の破片2点が出土し、1点(第34図40)を図示した。

石器は、打製石斧2点(第36図6)である。

小竪穴44 (第5・11図)

CT-34、CU-34グリッドで検出したが第7号竪穴住居址と重複している。重複による新旧関係は不明である。平面形は(95)×76cmの楕円形である。底面はほぼ平らで深さ19cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴46 (第5・29・34・35図)

第6号竪穴住居址の北に位置するCU-42・43グリッドで検出した。平面形は119×105cmの楕円形である。底面は平らで深さ19cmである。検出面の北壁際に4点の礫が集合していたが性格は不明である。

出土した遺物は、土器がある。縄文時代中期中葉の破片19点(内5点は接合)が出土し、9点(第34図41~44、第35図45~49)を図示した。

小竪穴47 (第5・29・35図)

第6号竪穴住居址の北に位置するCU-40グリッドで検出した。平面形は108×100cmの円形である。底面は平らで深さ16.5cmである。埋土中には小礫が包含され、壁には38×19cmを計る大きな礫が遺存していたが性格は不明である。

出土した遺物は、土器がある。縄文時代中期中葉の破片3点(内2点は接合)が出土し、1点(第35図50)を図示した。

小竪穴48 (第5・29・35・36図)

第6号竪穴住居址の北に位置するCT-41・CU-41グリッドで検出したが、約半分くらいは対象地外になる。平面形は(91)×91cmの円形と思われる。壁は袋状で底面は平らで深さ44cmである。埋土中には礫が1点包含されていたが、対象地外にかかるもので取り上げることはできなかった。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の小さな破片3点(第35図51~53)である。

石器は、黒曜石製の削器1点(第36図1)と剥片4点である。

小竪穴49 (第5・29・35図)

第6号竪穴住居址の北に位置するCU-42グリッドで検出したが、約半分くらいは対象地外になる。平面形は95×(65)cmの楕円形と思われる。南壁の立ち上がりはあまり良くない。底面は平らで深さ17.5cmと浅い。

出土した遺物は、土器がある。縄文時代中期中葉の小さな破片9点が出土し、4点(第35図54~57)を図示した。

小竪穴50 (第5・29・35図)

第6号竪穴住居址の北に位置するCU-40グリッドで検出した。平面形は55×53cmの円形である。底面は平らで深さ18cmと浅い。

出土した遺物は、少ないが土器と石器がある。

土器は、縄文時代中期中葉の小さな破片5点が出土し、2点(第35図58・59)を図示した。

石器は、黒曜石の剥片2点である。

小竪穴51 (第5・29・35図)

第6号竪穴住居址の北に位置するCU-41グリッドで検出した。平面形は99×75cmの楕

円形である。底面は平らで深さ13cmと浅い。

出土した遺物は、土器がある。縄文時代中期中葉の破片3点が出土し、2点(第35図60・61)を図示した。

小竪穴52(第5・31図)

第8号竪穴住居址の東に位置するDI-33・34グリッドで検出した。平面形は88×81cmの楕円形である。壁はだらだらと立ち上がり、底面は丸く深さ16cmである。

遺物の発見は皆無である。

小竪穴53(第5・31図)

小竪穴3の西に位置するCB-48・49、CC-48・49グリッドで検出した。平面形は66×45cmの不整三角形で、壁はだらだらと立ち上がり、底面は丸く深さ15cmである。

遺物の発見は皆無である。

(4) 遺物集中箇所

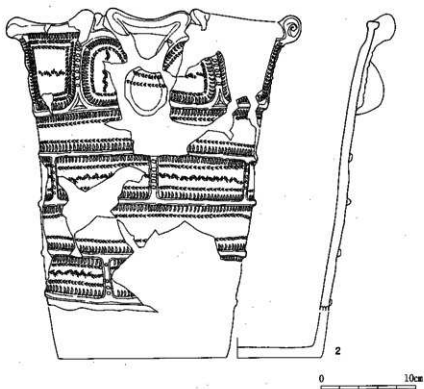
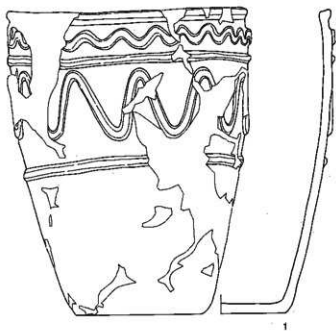
遺物集中箇所1(第5・37~47図)

第5図に示したように、北斜面のCA-51~55・CB-50~55・CC-49~55・CD-49~54・CE-49~54・CF-49~54・CG-50~54・CH-53・54グリッドの東西12m、南北12m程の範囲を遺物集中箇所1とした。しかし、その範囲を確定するにあたって明確な基準はないが、調査で土器・石器の出土量が多いと感じた範囲をその箇所と考えた曖昧なものである。グリッドから出土した遺物の数は一様ではなく中心部付近が多い傾向がみられた。なお、遺物集中箇所1の北端はすでに道路と水田造成により断ち切られていた。

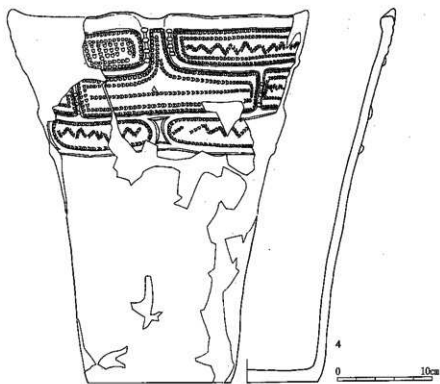
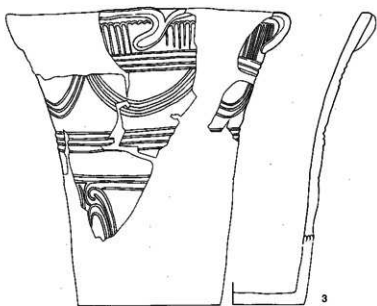
出土した土器は、中期中葉の貉沢から藤内期で、最も多かったのは新道期である。時期および系統別に図示すべきであるが、ページの関係で不規則になってしまったが、土器22点(第37~43図)と把手1点(第47図11)である。遺存率の低いものも図化した。本址の性格を物語っているようである。破損した土器や石器などを廃棄した場所と考えている。

2の口縁帯に抽象化した人面が施されている。12の有孔銅付土器の胴部上半に人面が付けられていたようであるが、僅かな小破片だけで図化できなかった。第47図11は人面把手の範囲にはいるものであるが、右目の上方を欠損する。2と7には補修孔が穿たれている。

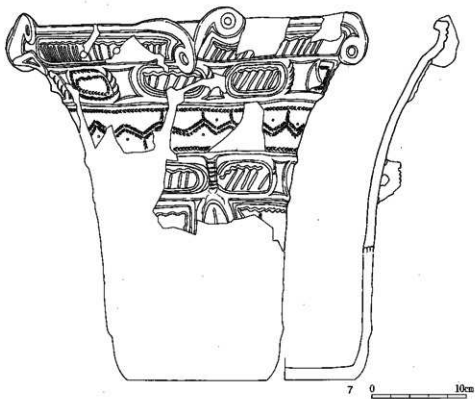
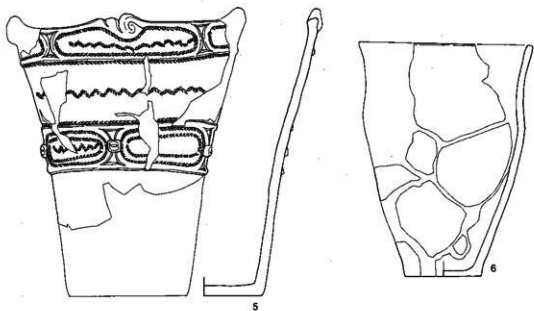
石器も多く第44~46図に示した。石鏃14点(1~10)、石錐2点、削器1点、石匙7点(43~47)、打製石斧31点(11~39)、磨製石斧(40)、乳棒状石斧10点(49・50)、横刃形石器13点(41・42)、石皿5点、凹石・磨石類が25点、蜂の巣石1点、敲石5点、原石が14点、黒曜石の剥片457点、その他剥片114点がある。



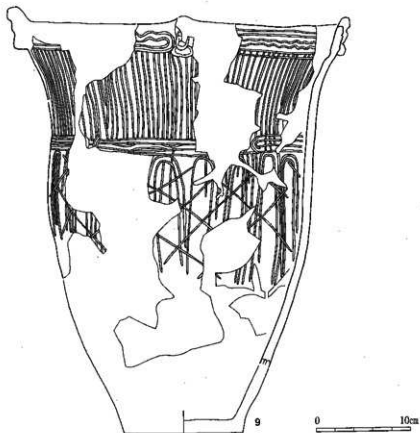
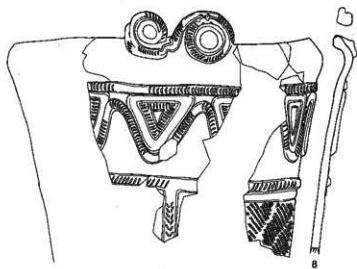
第37図 遺物集中箇処1出土土器実測図その1 (1:4)



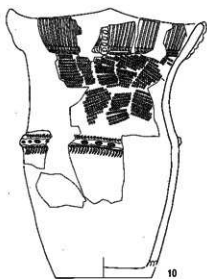
第38図 遺物集中簡処1出土土器実測図その2 (1:4)



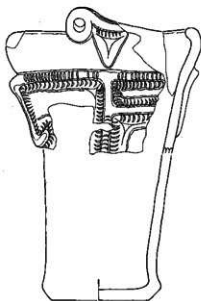
第39圖 遺物集中簡処1出土土器実測図その3 (1:4)



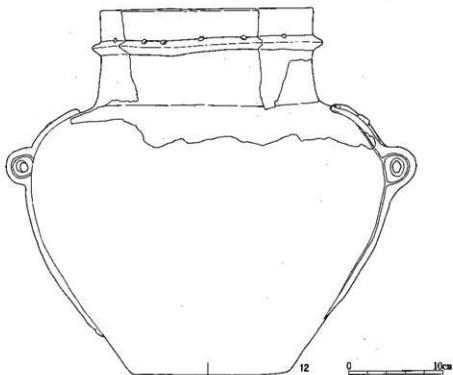
第40図 遺物集中簡処1出土土器実測図その4 (1:4)



10



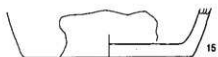
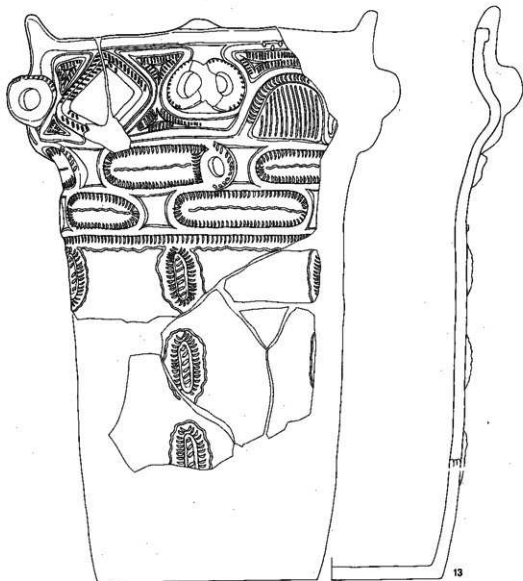
11



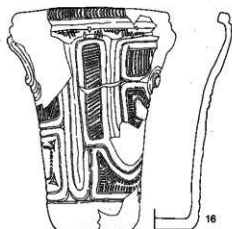
12

0 10cm

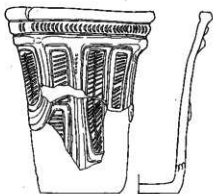
第41図 遺物集中簡処1出土土器実測図その5 (1:4)



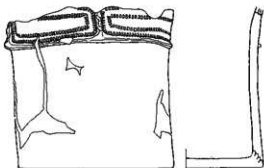
第42図 遺物集中館宛1出土土器実測図その6 (1:4)



16



17



18



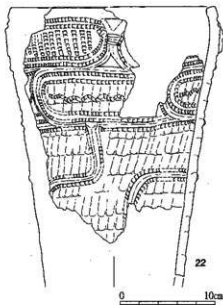
19



20



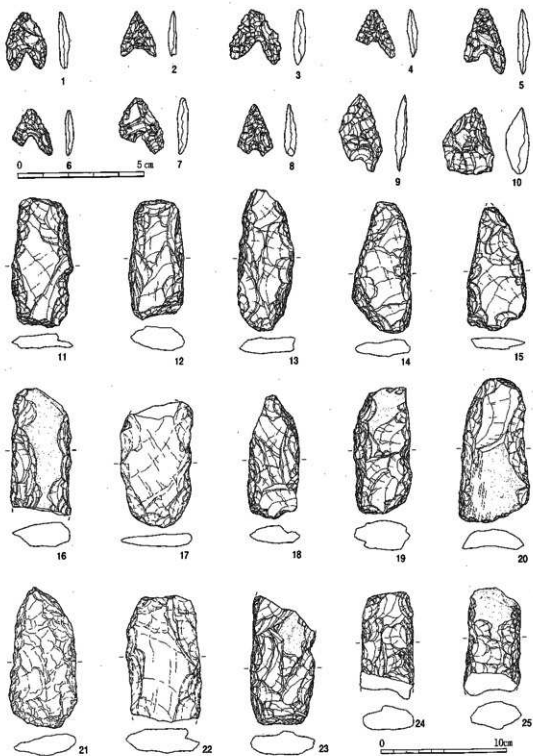
21



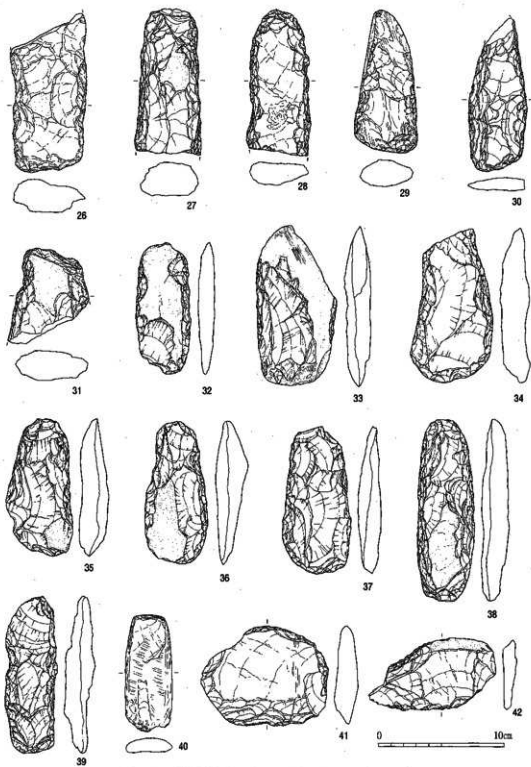
22

0 10cm

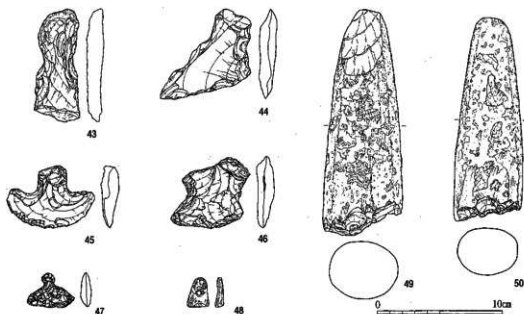
第43図 遺物集中箇処1出土土器実測図その7 (1:4)



第44図 遺物集中箇処1出土石器実測図その1 (1~10 2:3、11~25 1:3)



第45図 遺物集中箇処1出土石器実測図その2 (1:3)



第46図 遺物集中箇処1出土石器実測図その3 (1:3)

土製品は、土器破片利用の土製円盤は4点(第47図5~8)あり、8は半制品である。石製品は、滑石製垂飾1点(第46図48)と石棒1点である。石棒は自然石かもしれない。

(5) 遺構に伴わない遺物(第47・48図)

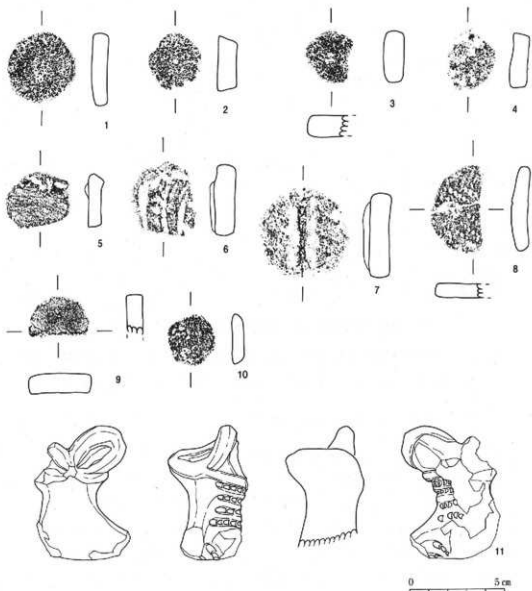
遺構に伴わない遺物は、土器・石器・土製品がある。

土器は、縄文時代中期から後期のものがあるが、中期中葉の猪沢から藤内期のものが最も多かったが、ここでは竪穴住居址の検出できなかった時期のものを図示した。

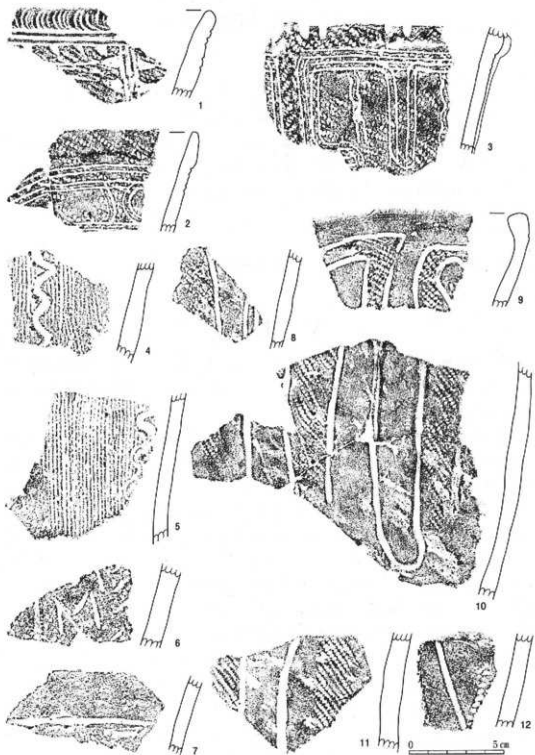
遺物集中箇処1から出土した3点(第48図1~3)は中期初頭期で、1は第8号竪穴住居址出土土器(第21図7)と同系統のものである。2・3は縄文が施された平出第Ⅲ類Aである。中期後葉期の2点(4・5)は第5・7号竪穴住居址から出土したが混入遺物である。同個体と思われる。中期末葉期の2点(6・7)はA地区のグリッド出土である。ここは尾根の先端部の平坦地で立地条件が異なっている。中期最末から後期初頭期のもの5点(8~12)を図示したが、8~11の4点は遺物集中箇処1出土である。

石器は図示しなかったが、石鏃4点、打製石斧11点、磨製石斧1点、横刃形石器5点、凹石・磨石類が3点、剥片は141点で黒曜石の剥片106点、チャートの剥片1点、その他剥片34点である。

土製品は、土器破片利用の土製円盤が2点(第47図9・10)で、9は半制品である。



第47图 第5·7号竖穴住居址、1号竖穴、遗物集中筒埴1、遺構外出土土製品実測図(1:2)



第48图 道桥外出土土器拓影(1:2)

2 近・現代の遺構と遺物

(1) 近世の墓塚

人骨が遺存し寛永通寶などが伴う近世の墓塚4基を検出した。

それらは検出時点においては近世の墓塚と認識できないため精査は実施したが、近世であることが明らかになる。対象時期とは考えていないため検出した事実の記載にとどめておきたい。検出位置については遺構配図(第5図)に示した。

(2) 遺物

僅かな陶器・磁器破片と砥石が出土したが対象時期とは考えていない。

V まとめ

発掘調査で縄文時代中期中葉の集落址であることが明らかになったが、整理期間の関係で未だ遺構・遺物の分析に手を付けることができないでいる。現場をはじめ整理作業の折々に感じたことを記しまとめにかえたい。

調査の対象は限られており、遺跡全体からみたら北東部の狭い範囲であったが、堅穴住居址8軒、堅穴1基、小堅穴53基、遺物集中箇所1を検出した。その状態は環状ないしは馬蹄形集落址が容易に想定できるものであった。

調査した住居址はそれほど多くないが、出土した土器をみる限りでは新道期が中心になるようである。該期に特有のタマガ形住居址は村内においては最大級のものであり、充実した集落であったように思われる。

南方200mに隣接する前尾根遺跡からも新道期の住居址は検出されており、現場では、並行する二つの尾根に同時期の集落址があることを考える日々であった。また、本遺跡の調査終了後に実施した北方400mの程久保遺跡からも新道期の住居址が検出され、並行する三つの尾根に同時期の集落址が存在していることが明らかになった。

本遺跡の標高は955m前後、前尾根遺跡は955m前後、程久保遺跡は960m前後であり、ほぼ同じ標高に立地する集落址であり、自然環境は同様であったことが理解できる。本遺跡の居住域は、痩せ尾根の南斜面から北斜面に広がり尾根全域のようである。前尾根遺跡は尾根幅が当地方では最大級のもので、尾根上の平坦部から南斜面を居住域にしていたようである。程久保遺跡は尾根のきつい南斜面を居住域としている。

南から前尾根遺跡、上居沢尾根遺跡、程久保遺跡がならぶが直線距離で600mである。くどくなるがそれらの尾根は並行しており、隣接する極めて狭い地域の同標高に同時期の集落が展開していたことに驚いている。三遺跡三様の居住域が何に起源しているのかわからないが、新道期における遺跡立地をはじめ集落研究上での好資料を得ることができたようである。

報告にあたり土器と石器の取り扱いが異なりわかりにくいものにしてしまったが、今後分析を進め報告をしていきたいと思っている。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

- 1954 12 長野県教育委員会「長野県埋蔵文化財包蔵地調査カード（調査者 宮坂英次）」
- 1956 03 信濃史料刊行会「信濃史料 第一巻上」
- 1972 03 長野県教育委員会「昭和46年度 農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
- 1974 07 諏訪清陵高等学校地歴部考古班「柏木明神遺跡」（『土』8）
- 1980 03 長野県教育委員会「昭和54年度 八ヶ岳西南遺跡群分布調査報告書」
- 1981 10 長野県教育委員会「昭和51・52年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その4」
- 1985 07 原村「原村誌 上巻」
- 1987 03 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財6 白ヶ原遺跡 村道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書」
- 1991 11 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財小報7 平成4年度県営ほ場整備事業恩前地区内の踏査報告書 裏長峰・程久保・恩膳南・恩膳西遺跡」
- 1992 02 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財20 長峰遺跡 平成3年度県営ほ場整備事業丸山地区に伴う緊急発掘調査報告書」
- 1993 03 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財小報8 平成4年度県営ほ場整備事業恩前地区内の発掘調査終了報告書 裏長峰・上居沢尾根・程久保・土井平遺跡」
- 1993 03 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財小報10 上居沢尾根遺跡調査報告書 重機による桑の抜根作業立会い調査」
- 1993 03 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財小報11 長野県原村の遺跡地名表 1993年3月現在」

表2 遺構一覧表

竪穴住居址

表中のカッコ付けの数値は推定を示す

番号	図版	検出位置	平面形	規 模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
2	第6図	BQ-52 BR-52 ほか	円形	(380)	(380)	13	農道で多くを破損、3号住居址・小竪穴4と重複、周溝、柱穴4、埋燵炉、中期中業炉体土器1・土器破片、黒曜石剥片1
3	第6図	BR-50 BS-50 ほか	円形			7	農道で多くを破損、2号住居址と重複残存範囲は狭く規模は不明、柱穴1、中期中業土器1、土器破片、黒曜石剥片2、剥片1
4	第6図	BN-53 BO-53 ほか	円形	(330)	(330)	7.5	農道で多くを破損、柱穴2、黒曜石剥片1、剥片1
5	第7図	CV-37 CW-37 ほか	楕円形	482	(380)	36.5	6号住居址・小竪穴43と重複、方形石囲炉、中期中業土器1・土器破片、石鏃1、両極石核1、打製石斧4、原石1、黒曜石剥片34、剥片8、土製円盤1
6	第7図	CU-38 CV-38 ほか	楕円形	(455)	(380)	31	新・旧2時期、5号住居址・小竪穴43と重複、地床炉、埋燵炉、中期中業炉体土器1・土器破片、石鏃4、石鎌1、石匙1、打製石斧3、横刃形石器4、黒曜石剥片39、剥片7
7	第11図	CT-34 CU-34 ほか	タマゴ形	730	(600)	55	3分の1位は対象地外、新・旧2時期、同心円上建て直し、新道式手法の住居址、周溝、柱穴6(9)、円形石囲炉、埋燵炉、縄文時代中期中業土器9、炉体土器1、石鏃5、石鎌4、両極石核3、石匙3、打製石斧19、小形磨製石斧1、乳棒状石斧3、横刃形石器10、石皿1、凹石・磨石類12、特殊磨石1、原石2、石核1、黒曜石剥片300、チャート剥片1、剥片41、土製円盤1、
8	第19図	CT-30 CU-30 ほか	楕円形	733	630	47	新・旧2時期、同心円上建て直し、新道式手法の住居址、周溝、柱穴7、方形石囲炉・中期中業土器6、有孔鍔付土器1、石鏃15、削器10、石鎌2、両極石核6、打製石斧21、磨製石斧1、乳棒状石斧2、横刃形石器17、凹石・磨石類11、石核1、黒曜石剥片389、剥片35
9	第24図	CS-28 CT-28 ほか	楕円形			32	小竪穴30と重複、多くは対象地外、調査範囲が狭く規模は不明、新道式手法の住居址、周溝、柱穴1、炉は未確認、中期中業土器破片、石鏃1、打製石斧2、黒曜石剥片6

竪穴

番号	図版	検出位置	平面形	規 模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
1	第24図	DH-36 DI-36 ほか	円形	388	378	15.5	柱穴・炉址は未検出、中期中業土器破片、石鏃2、黒曜石剥片22、剥片2、土製円盤2

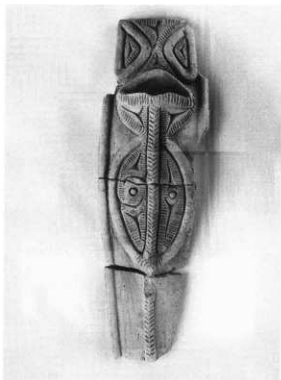
小竪穴

表中のカッコ付けの数値は推定を示す

番号	図版	検出位置	平面形	規 模			遺構の特徴・出土遺物等
				長軸	短軸	深さ	
1	第25図	BS-55 BT-55 ほか	隅丸長方形	297	112	123	陥し穴、レンズ状堆積、底部に小ビット、中期中業土器破片、石鏃1、乳棒状石斧1、原石2、黒曜石剥片6
2	第27図	BV-49 BW-49	不整形円形	118	111	6	
3	第27図	CC-48 CC-49	不整三角形	147	107	22	
4	第6図	BR-51 BR-52	不整楕円形	92	(65)	15.5	2号住居址と重複・中期中業土器破片、黒曜石剥片11、剥片1
5	第27図	BT-50 BT-51	不整形円形	90	90	18	中期中業土器破片
6	第26図	BN-56 BO-56 ほか	隅丸長方形	332	121	137	陥し穴、レンズ状堆積、底部に小ビット、中期中業土器破片、剥片1
7	第26図	BN-57 BO-57	隅丸長方形	311	121	140	陥し穴、レンズ状堆積、底部に小ビット、中期中業土器破片、黒曜石原石1、黒曜石剥片1
8	第25図	BH-61 BI-60 ほか	隅丸長方形	305	132	114	陥し穴、レンズ状堆積、底部に小ビット、中期中業土器破片、黒曜石原石2
9	第27図	CT-49 CU-49 ほか	不整隅丸三 角形	101	62	7	
10	第27図	CT-51	楕円形	130	97	31	中期中業土器破片
11	第27図	CQ-51 CQ-52	楕円形	90	54	27	
12	第27図	CM-51 CN-51	楕円形	98	83	5	中期中業土器破片、黒曜石剥片2
13	第27図	CJ-51	不整形台形	118	104	5	
14	第27図	CI-47 CI-48	隅丸方形	96	81	8	
15	第27図	CC-50	円形	133	132	34.5	環遺物集中箇所1南外れ、中期中業土器破片、黒曜石剥片1
16	第28図	BT-51 BU-51	不整形円形	98	87	22	
17	第29図	CU-40	楕円形	77	66	11	中期中業土器破片、剥片1
18	第30図	CV-36 CW-36	楕円形	169	(135)	27.5	7号住居址・小竪穴42と重複・中期中業土器破片、叩石1、黒曜石剥片1
19	第24図	CU-29 CU-30 ほか	円形	118	115		集石、中期中業土器破片、打製石斧1、黒曜石剥片2
20	第24図	CU-29	不整形円形	85	72	11.5	中期中業土器破片

21	第28図	CX-31 CY-31	楕円形	80	61	11	
22	第28図	DB-31	不整形	86	68	4	
23	第28図	DB-31 DC-31	楕円形	102	81	12	
24	第28図	DD-33 DE-32 DE-33	楕円形	98	86	20	
25	第30図	CX-36 CY-36 ほか	円形	(95)	95	21.5	小堅穴26と重複、礫、中期中葉土器破片
26	第30図	CY-36 CY-37	楕円形	(100)	(86)	35.5	小堅穴25と重複、礫、中期中葉土器破片、打製石斧1
27	第30図	CX-35	不整形	105	(94)	21.5	小堅穴28と重複、底面に大きな礫
28	第30図	CW-35 CX-35	楕円形	(106)	80	12	小堅穴27と重複、礫、黒曜石剥片1
29	第30図	CY-35 CY-36	楕円形	90	80	23	中期中葉土器破片、黒曜石剥片1
30	第24図	CT-29	不明				西は用地外、9号堅穴住居址と重複、調査範囲は少なく平面形、規模は不明・中期中葉土器破片、黒曜石剥片1
31	第28図	DE-36	楕円形	88	76	18	
32	第28図	DF-37 DG-37 ほか	円形	152	140	20	礫、中期中葉土器破片、打製石斧1、黒曜石剥片4
33	第28図	DN-38 DO-38	円形	140	138	20	
34	第31図	DS-36 DS-37	不整形	131	122	12	礫
35	第28図	DT-36 DT-37	不整形	115	110	21	
36	第28図	DS-38 DS-39	楕円形	118	89	66	
37	第31図	DS-39	楕円形	112	99	39	凹石1
38	第30図	CW-36	楕円形	(100)	84	32	小堅穴39と重複、中期中葉土器破片、黒曜石剥片1
39	第30図	CW-36 CX-36	円形	72	(72)	19	小堅穴38・40と重複
40	第30図	CW-36 CW-37	不整形	115	(115)	26.5	小堅穴39・41と重複、中期中葉土器破片
41	第30図	CW-36 CW-37	楕円形	(100)	90	17.5	小堅穴40・42と重複
42	第30図	CV-36 CW-36 ほか	円形	(79)	79	26	小堅穴18・41と重複
43	第30図	CW-37	円形	110	(100)	36	5号住居址と重複、中期中葉土器破片、打製石斧2
44	第11図	CT-34 CU-34	楕円形	(95)	76	19	7号住居址と重複
45	第31図	DS-41 DS-42	不整形	135	121	11	
46	第29図	CU-42 CU-43	楕円形	119	105	19	検出面に礫、中期中葉土器破片
47	第29図	CU-40	円形	108	100	16.5	中期中葉土器破片
48	第29図	CT-41 CU-41	円形	(91)	91	44	半分位は対象地外、中期中葉土器破片、黒曜石製削器1、剥片4

49	第29図	C U - 42	楕円形	95	(65)	17.5	半分位は対象地外、中期中葉土器破片
50	第29図	C U - 40	円形	55	53	18	中期中葉土器破片、黒曜石剥片2
51	第29図	C U - 41	楕円形	99	75	13	中期中葉土器破片
52	第31図	D I - 33 D I - 34	楕円形	88	81	16	
53	第31図	C B - 48 C C - 48 ほか	不整三角形	66	45	15	



第 8 号竪穴住居址出土

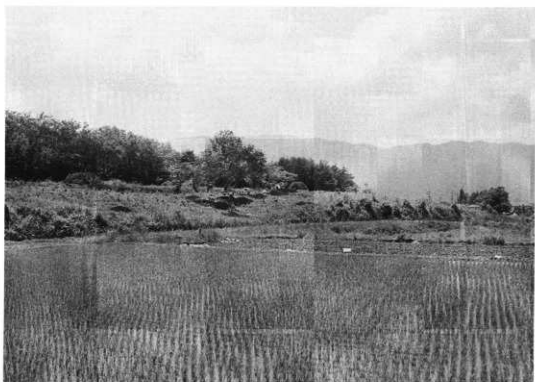


写真 1 遺跡遠景（北東から）

写真図版 2



写真2 調査区その1 (北東から)

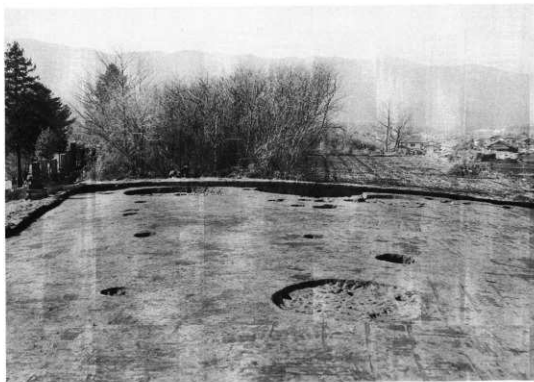


写真3 調査区その2 (東から)

写真4 第2・3号竪穴住居址（東から）
上 第2号竪穴住居址
下 第3号竪穴住居址



写真5 第2号竪穴住居址埋甕埴（南から）





写真6 第5・6号竪穴住居址遺物出土状態(東から)

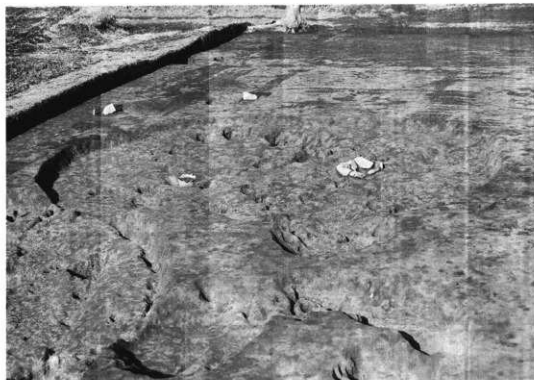


写真7 第5・6号竪穴住居址(南から)

写真8 第5・6号竪穴住居
址検出状態（東から）

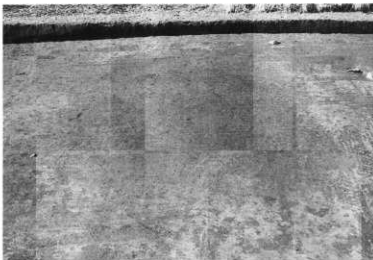


写真9 第5号竪穴住居址
石囲炉（南から）



写真10 第6号竪穴住居址
埋塞炉埋設状態
（南から）





写真11 第7号竪穴住居址遺物出土状態（東から）



写真12 第7号竪穴住居址（東から）

写真13 第7号竪穴住居址
検出状態（東から）

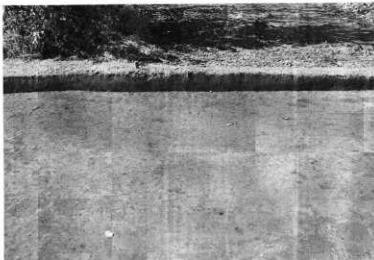


写真14 第7号竪穴住居址
埋戻伊羅設状態
（南から）

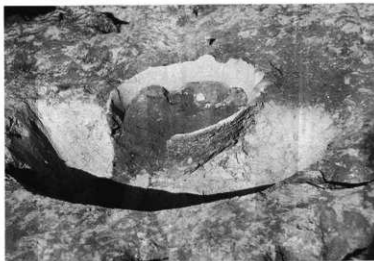


写真15 第7号竪穴住居址
石囲炉（南東から）





写真16 第8号竪穴住居址遺物出土状態（東から）



写真17 第8号竪穴住居址（東から）

写真18 第8号竪穴住居址
検出状態（東から）

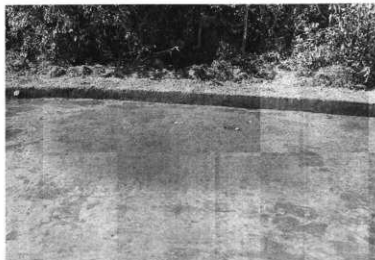


写真19 第8号竪穴住居址
遺物出土状態
（南から）



写真20 第8号竪穴住居址
石囲炉（東から）



写真図版10

写真21 第9号竪穴住居址
(東から)



写真22 1号竪穴検出状態
(南から)

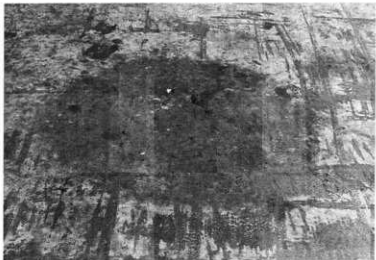


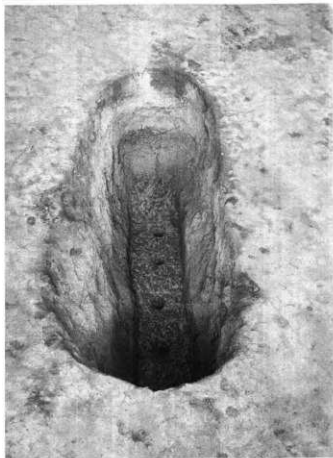
写真23 1号竪穴 (南から)



写真24 小堅穴1土層（東から）



写真25 小堅穴1（西から）



写真図版12

写真26 小堅穴6・7検出状態(北から)



写真27 小堅穴6・7(東から)



写真28 小堅穴6(東から)

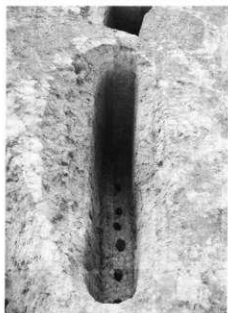


写真29 小堅穴7(東から)

写真30 小壜穴8 検出状態 (東から)



写真31 小壜穴8 上層
(西から)



写真32 小壜穴8 (東から)



写真図版14

写真33 小壜穴19検出状態
(南から)



写真34 小壜穴19竪出土
状態その1 (東から)



写真35 小壜穴19竪出土
状態その2 (東から)

